

南陽市須刈田

大野平遺跡

第 2 次 調 査 報 告 書

1 9 8 6

南陽市須刈田大野平遺跡調査団
南陽市教育委員会

序

この報告書は、縄文時代の遺跡として広く知られている、須刈田大野平遺跡の学術的な発掘調査の記録であります。

当市では、市制施行20周年を目処として市史編さん事業を開始し、原始古代中世並びに近世といった各時代の史実解明及び資料の収集に努めているわけですが、その一環として計画された調査事業であります。

市内には、縄文時代の遺跡は数多く確認されていますがこの大野平遺跡はその中で特に高原の集落遺跡として昭和35年柏倉亮吉氏（県立米沢女子短期大学学長）を团长とする調査団によって発掘調査が行なわれ、以来一躍注目をあつめているところですが、この度さらに詳しい文化の解明と資料の収集を目的として実施したものであります。このように学術的な調査を意図したことから調査体制の充実をはかり、より多くの成果と効率化を高めるため県内の縄文文化の研究者各位の参加をよびかけ調査団の編成を行いましたところ、多忙な中、加藤稔氏を始め、長井市、米沢市、川西町の各教育委員会のご協力や市町の考古学研究者及び学校の先生方、さらに山形大学学生の皆々様にご参加をいただき私どもの願いどおりの調査団が結成できましたこと誠に有難いことであります。あらためて各位に深甚なる謝意と敬意を表する次第であります。

また本遺跡の地権者である本木辰雄氏には父子二代にわたっての保存と調査協力、また相沢文子氏には宿舎での食事や5kmの山道の昼食運搬、修道館管理人大竹秀子氏の温い配慮等本当に有難く心から厚くお礼申しあげます。

この報告書は前述のように関係なされた皆々様の総力の結晶であり、市民の埋蔵文化財に対する理解を深める一助ともなることを念願し、さらに調査目的が十分達成されたことを心からお喜び申し上げたいと存じます。

昭和61年3月

南陽市教育委員会

教育長 渋谷 幸一

例　　言

1 本書は、昭和59年8月に実施した、南陽市須刈田大野平遺跡第2次調査に関する報告書である。
なお、第1次調査については、柏倉亮吉先生のご了解を得て、掲載させていただいた。

2 発掘調査期間 昭和59年8月1日～同年8月13日

3 調査体制 調査主体 南陽市教育委員会
調査担当 南陽市須刈田大野平遺跡調査団

4 南陽市須刈田大野平遺跡調査団の構成

調査団顧問 柏倉 亮吉 (山形県立米沢女子短期大学学長)
団長 加藤 稔 (山形県立上山農業高等学校教諭)
副団長 錦 三郎 (南陽市史上巻執筆員)
佐藤正四郎 (長井市文化財保護審議委員)
調査主任 佐藤 鎮雄 (南陽市立宮内中学校教諭、南陽市史上巻編集主任)
同副主任 吉野 一郎 (南陽市教育委員会社会教育課学芸員)
調査員 橋爪 健 (置賜考古学会会長)
音井敬一郎 (山形県立宮内高等学校教諭、南陽市史上巻執筆員)
龜田 吴明 (日本考古学協会会員)
茨木 光裕 (同 上)
秦 昭繁 (同 上)
山口 博之 (山形市立第七小学校教諭)
青木 敏雄 (高畠町立二井宿小学校教諭)
濱田さよ子 (高畠町立高畠小学校教諭)
大河原美恵子 (川西町立小松小学校教諭)
特別調査員 月山 降弘 (川西町教育委員会職員)
手塚 孝 (米沢市教育委員会職員)
菊地 政信 (同 上)
調査補助員 高橋亜貴子 (山形大学人文学部学生)
二瓶 由佳 (同 上)
中島 正己 (同 上)

岩見 和泰 (山形大学人文学部学生)

調査協力員 本木 辰雄 (地権者)

事務局

事務局長 社会教育課課長 佐藤豊雄 (昭和59年度), 粟野忠雄 (昭和60年度)

同 次長 社会教育課次長 門間 清 (昭和59年度), 二瓶精藏 (昭和60年度)

社会教育課次長兼文化係長 渡部昌久

局 員 文化係主事 須藤房男 同学芸員 吉野一郎

5 発掘調査参加者

加藤稔, 佐藤正四郎, 佐藤鎮雄, 橋爪健, 茨木光裕, 秦昭繁, 山口博之, 青木敏雄, 濱田さよ子, 大河原美恵子, 月山隆弘, 高橋亜貴子, 二瓶由佳, 中島正己, 岩見和泰, 本木辰雄, 吉野一郎 (以上団員) 海野丈芳, 矢口広道

6 調査協力 山形県長井市, 山形大学附属博物館, 地元須刈田地区, 南陽市立修道館,
㈱松田組, 川崎利夫, 大類誠, 本木勝清, 松木宏峰

7 各作業参加者

地形測量調査 茨木光裕, 中島正己, 須貝貴美子, 吉野一郎

試掘作業員 本木辰雄, 高橋力, 高橋弘

遺物整理作業員 桑原京子, 高橋さち子, 佐藤真由美, 今野由美

宿舎賄担当 相沢文子

8 調査指導 山形県教育庁文化課

9 実施面積 調査範囲 約 20,000 m^2 精査面積 32 m^2

10 調査報告書作成体制

① 執筆・挿図作成等分担

区分	文章執筆	挿図作成	区分	文章執筆	挿図作成
第1章 1	茨木 光裕	茨木 光裕	第6章 1	吉野 一郎	吉野一郎 茂木克則 中島正己
〃 2	菅井敬一郎	菅井敬一郎(図と写真)	〃 2	山口 博之	山口 博之
第2章	佐藤 鎮雄	佐藤鎮雄 中島正己 佐藤鎮雄 二瓶由佳	〃 3	秦 昭繁	秦 昭繁 二瓶由佳
第3章	佐藤 鎮雄	佐藤鎮雄 濱田さよ子 大河原美恵子	第7章 1	佐藤 鎇雄	
第4章	吉野 一郎	吉野一郎 茂木克則	〃 2	山口 博之	山口 博之
第5章 1	高橋亜貴子	高橋亜貴子	〃 3	秦 昭繁	秦 昭繁
〃 2	岩見 和泰	岩見 和泰	〃 4	菅井敬一郎	
〃 3	青木 敏雄	青木 敏雄	第8章	佐藤正四郎 加藤 稔	

② 遺物写真撮影および同図版作成は、佐藤鎮雄と茂木克則（南陽市史考古資料篇担当）が行った。

③ 編集は、佐藤鎮雄、吉野一郎、茂木克則が行った。

11 凡　例

- ① 本書中の記号はつぎのとおりである。また、遺構分類は、原則として発掘時のものによった。
 S T—住居跡、S X—性格不明遺構、E P—住居跡内柱穴、S M—配石遺構、T—トレンチ
 T P—試掘穴
- ② 図、図版中の方位記号は、磁北をさす。
- ③ 土色表示については、「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄 1976)によった。
- ④ グリッドのあらわし方は、X軸-Y軸の順であり、各グリッドは、北西コーナーの番号で代表させる。
- ⑤ 遺構実測図の縮尺は、 $\frac{1}{60}$, $\frac{1}{80}$ とし、各々にスケールを入れた。
- ⑥ 遺物実測図の縮尺は、 $\frac{1}{2}$, $\frac{2}{5}$, $\frac{1}{3}$ 、拓影図は、 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{3}$ を原則とし、各々スケールを入れた。
- ⑦ 遺物図版の縮尺は、 $\frac{1}{2}$, $\frac{2}{5}$, $\frac{1}{3}$ を原則とした。
- ⑧ 土器拓影図では、断面に向って左側が表、右側が裏である。
- ⑨ 第2次調査出土遺物のうち、土器については、拓影図(第24図～第30図)と、第22図および、図版(第18図版～第21図版)各図中の番号は共通する。石器については、実測図(第31図～第32図)と第23図および図版(第22図版～第23図版)も同様である。
- ⑩ 遺構や遺物分布の図中の断面図等における数値は、標高をあらわす。

目 次

第1章 立地と環境		第7章 考 察	
1 遺跡の立地と環境	1	1 大野平遺跡の遺構について	55
2 南陽市須刈田周辺の地質	4	2 大野平遺跡の早・前期の土器	62
第2章 調査に至る経過	9	3 山形・宮城両県における範状石器の 地域性—原石と石器形態差に関する 予察	65
第3章 第1次調査の概要	20	4 大野平遺跡第2次調査出土石器の石 材について	74
第4章 第2次調査の経緯	29	第8章 これからの課題	
第5章 検出された遺構（第2次調査）		1 貝殻沈線文土器と住居跡について	76
1 S T 1	32	2 第II群土器(鶴ヶ島台式)について	77
2 S T 2	34	3 繩文・条痕文土器と住居跡について	78
3 S X 1	36	4 上川名II(室浜)式土器期の遺跡に ついて	79
第6章 第2次調査出土遺物			
1 出土遺物の分布について	38		
2 大野平遺跡の土器群	42		
3 大野平遺跡出土の石器	51		

挿図目次

写真A 土層断面	7	第11図 第1次調査第1号住居跡	22
写真B 各層の鉱物	8	第12図 第1次調査第2号住居跡	23
第1図 遺跡位置図・分布図	2	第13図 第1次調査出土土器(1)	25
第2図 大野平遺跡地形図	3	第14図 第1次調査出土土器(2)	26
第3図 大野平遺跡の土層	7	第15図 第1次調査出土土器(3)	27
第4図 粘土鉱物のエックス線回折図	7	第16図 第1次調査出土土器(4)	28
第5図 本木氏収集土器(1)	11	第17図 第2次調査グリッド配図	30
第6図 本木氏収集土器(2)	13	第18図 第2次調査遺構全体図	31
第7図 本木氏収集土器(3)	14	第19図 第2次調査S T 1	33
第8図 本木氏収集石器他(1)	17	第20図 第2次調査S T 2	35
第9図 本木氏収集石器他(2)	19	第21図 第2次調査S X 1	37
第10図 第1次調査の地点別層位柱状模式図	22	第22図 第2次調査出土土器分布図	39

第23図	第2次調査出土石器分布図	41	第32図	第2次調査出土石器(2)	54
第24図	第2次調査出土土器(1)	43	第33図	大野平遺跡と他の遺跡における縄文	
第25図	第2次調査出土土器(2)	44		早・前期の土器	63
第26図	第2次調査出土土器(3)	45	第34図	範状石器長さ計測部分図	66
第27図	第2次調査出土土器(4)	46	第35図	遺跡分布図	67
第28図	第2次調査出土土器(5)	48	第36図	各遺跡の範状石器長さ分布図	69
第29図	第2次調査出土土器(6)	49	第37図	中野A遺跡の貝殻沈線文土器の	
第30図	第2次調査出土土器(7)	50		時期の住居	76
第31図	第2次調査出土石器(1)	53			

図版目次

第1図版	大野平遺跡と周辺地区	第13図版	本木氏収集石器(8)
第2図版	遺跡遠景	第14図版	第1次調査の調査状況他
第3図版	本木氏収集土器(1)	第15図版	第1次調査出土土器他
第4図版	本木氏収集土器(2)	第16図版	第2次調査の調査状況(1)
第5図版	本木氏収集土器(3)	第17図版	第2次調査の調査状況(2)
第6図版	本木氏収集石器(1)	第18図版	第2次調査出土土器(1)
第7図版	本木氏収集石器(2)	第19図版	第2次調査出土土器(2)
第8図版	本木氏収集石器(3)	第20図版	第2次調査出土土器(3)
第9図版	本木氏収集石器(4)	第21図版	第2次調査出土土器(4)
第10図版	本木氏収集石器(5)	第22図版	第2次調査出土土器(1)
第11図版	本木氏収集石器(6)	第23図版	第2次調査出土石器(2)
第12図版	本木氏収集石器(7)		

第1章 立地と環境

1 遺跡の立地と環境（第1図、第2図、第1図版、第2図版）

山形県を縦走して北流する最上川（上流部は松川）は、県の南端部に連なる吾妻連峰にその源を発し、米沢盆地を蛇行しながら北西流し、長井市から、朝日山地と白鷹丘陵にはさまれた五百川峡谷の狭窄部を流下して山形盆地へと入る。

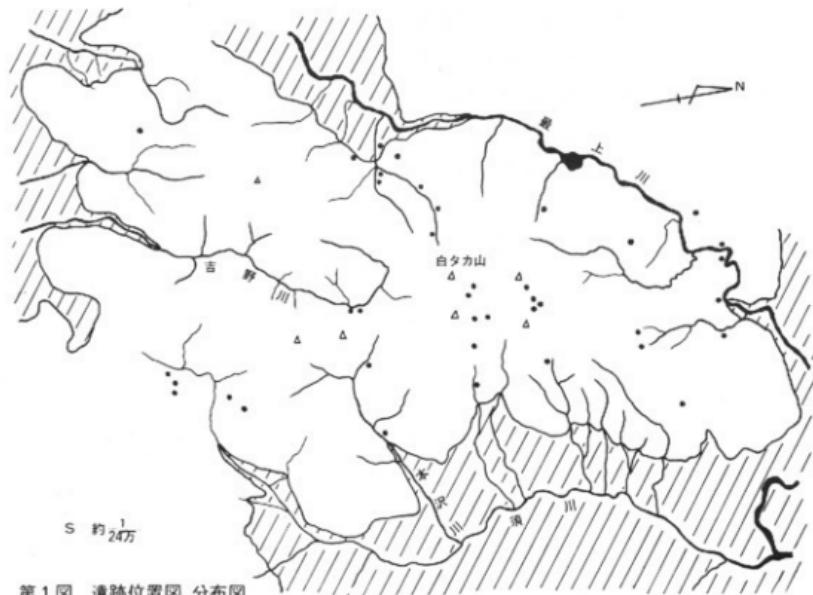
米沢盆地は、米沢市、南陽市、高畠町、川西町の2市2町にわたり、西方に笛野山断層崖があり、東方を奥羽山系によって画された北にやや広い菱形状の陥没盆地である。標高は盆地の平野部で、200～300mを計る。南陽市は、この米沢盆地の東北端に位置する。

市域の南半は、一面の水田地帯が広がり、北部は、白鷹丘陵に属する大鷹山（標高772m）、高戸屋山（標高793m）などを含む山地が連なり、米沢盆地の北縁を区画している。この丘陵から流下する吉野川、織機川などの河川は、いずれも南流し、市域南端を流下する最上川に入る。吉野川は、白鷹丘陵に深く侵入した南陽市大字小滝地内に端を発し、平野部との傾斜変換線付近に、その西側を流下する織機川とともに合成扇状地を形成している。吉野川の流程にそって伸びる小滝街道は、置賜と村山の両地方を結ぶ主要なルートとして重要な位置を占めていた。

白竜湖を含む米沢盆地の北部は、米沢湖盆の泥炭層が厚く堆積し、大谷地と呼ばれる低湿地帯を形成しており、白竜湖は、湖盆最深部にあたり、その遺存湖といわれている。この大谷地の縁辺は、その東部を長峯山から派生する丘陵によって画され、その山麓部に日向洞穴、火箱岩洞穴など高畠町所在の洞穴遺跡群が散在する。また北部は、平次林山、十分一山へと弧状に連なる丘陵によって区画され、松沢、小岩沢、十分一山、烏帽子山など、縄文前期から後期にわたる遺跡群が分布する。

一方、この大谷地の南方には、低平な長岡山の丘陵があり、旧石器時代の遺物も若干採取されているが、縄文時代、及び古墳時代にわたる遺跡群が所在する。この長岡山丘陵の端部を断ち切って営まれた、主軸長96mの前方後円墳である稻荷森古墳がある。平野部及びその山麓に所在する遺跡は、白竜湖を含む大谷地の縁辺にそって分布し、奈良・平安期の遺跡は、吉野川、織機川の扇状地に多く立地する。また、南陽市の大字「郡山」は、置賜郡が出羽国移管後の置賜郡衙の推定地とされており、南陽市の北縁の丘陵には、二色根古墳群など、横穴式石室を内部主体とする群集墳が密集する。

大野平遺跡は、市域の北縁に連なる白鷹丘陵から南流する織機川にそって登った山地にあり、国鉄長井線、宮内駅の西北方約5kmに位置する。遺跡は、南陽市漆山須刈田に所在し、標高は約460mである。付近は、周囲を馬蹄状に山丘にとり囲まれた小盆地状の景観を呈し、北東方に開口する台地で、塙ノ沢付近を流下する織機川本流から分岐して若松山（標高459m）から東方へ派生する尾根の鞍部に向ってのびる支谷の源頭部にあたる。遺跡の所在する台地は、北東部の開口部にむか



第1図 遺跡位置図 分布図



第2図 大野平遺跡地形図

って、ゆるく傾斜し、畑及び牧草地として利用されているが、南縁にそって、谷が深く入り込み台地の縁辺を区画している。台地の平坦面と谷底部との比高は約3m程である。

遺物は、以前から耕作などに伴なって採取されているが、その散布状況は、三方を丘陵にとり囲まれた台地のほぼ全面にわたっており、西方から屈曲して入り込む谷にそった道路の切土面にも散見され、また、谷の源頭部付近にも認められる。特に、今次の調査区を設定した付近から、台地の縁辺にそって、谷に落ち込む南面する緩斜面に稠密に散布し、遺構の分布とほぼ一致するものと考えられる。

大野平遺跡は、白鷹丘陵の山中に立地する遺跡であるが、白鷹丘陵は、東を山形盆地の須川、西を最上川にはさまれた丘陵で、白鷹山（標高986m）を最高点として、黒森山、東黒森山、西黒森山、高戸屋山、大鷹山などからなり、標高は、400～800m程度で、波浪状の起伏に富み、山形・上山両盆地の西縁から米沢盆地の北端にのびる。この丘陵から、本沢川、吉野川などの主要河川と幾条もの小溪が谷を侵み、丘陵東面は須川に、西面は直接最上川に流入している。

遺跡は、この丘陵全面では約40か所あまりが確認されているが、その立地をみると、河川にそった段丘や、谷に張り出した丘陵台地上の平坦面に多く分布する。また、平野部との傾斜変換線付近の山麓部にも多い。特に、山辺町畠谷、大蔵周辺の小盆地の縁辺部が稠密である。時期的には、縄文中期前・中葉のものが圧倒的で、縄文早期～前期にかかるものとして、南陽市大野平遺跡、山形市上平遺跡など、4か所あまりである。また縄文後・晩期の遺跡は急激に減少する傾向にある。その規模は、比較的小規模なものが多いが、その山麓部に、山形市百々山遺跡、山辺町嶽原遺跡など、大規模な遺跡が点在する。

また、白鷹山北麓の火山泥流上に山辺町向坂、薙田石などの良好な遺跡があり、これらは、小規模な遺跡群を包括した中心的な拠点集落のような様相を呈する。

大野平遺跡では、以前から耕作などに伴なって遺物が採取されており、縄文早・前期の遺物とともに、同中期の遺物も認められ、断絶はあるものの、比較的長期にわたって機能した遺跡であると考えられる。

2 南陽市須刈田周辺の地質

(1) まえがき

須刈田周辺の地質は、若松山を中心とする先新第三系の花崗閃緑岩・石英閃緑岩から構成されている。第四系は、須刈田を含む北東方向の谷底平野沿いに細長く分布している。

大野平遺跡について、第Ⅰ層、第Ⅱa層・第Ⅱb層、漸移層（第Ⅱc層）、第Ⅲ層の地層を検討した。

(2) 地質

先新第三系

花崗閃綠岩

須刈田周辺の花崗閃綠岩は、若松山を中心とし、南陽市、長井市と白鷹町地域に露出する。その面積は、およそ東西7km×南北12kmである。（北・他、1966、神保・田宮、1972）

岩質は、花崗閃綠岩の岩体で、その周辺部は石英閃綠岩に漸移する。

石英閃綠岩の主成分鉱物は、角閃石、黒雲母、斜長石、正長石、石英などである。（写真B 1～3）

この岩体について測定されたK-Ar年代は、2例ある。即ち、長井市大石東方約1kmに産する石英閃綠岩は、93m.y.（黒雲母）、114m.y.（角閃石）である。（柴田・矢崎、1985）その他、この岩体の真東に吉野川をへだてて鷹戸山を構成する岩体で、釜渡戸産の花崗閃綠岩のK-Ar年代は、119m.y.（黒雲母）である。（井井、1976）これは中生代白亜紀前期に相当する岩石である。

これらの花崗閃綠岩類が露出する長井市伊佐沢地区や最上川に沿う地域では、風化作用を受けて、マサ状になっている場所があり、また、赤色土化が著しい。

第四系

沖積層

この地域の水系は、織機川水系に含まれる。その支流が須刈田部落付近で、流路を北東一南西に変える。この小河川に沿い、東一西の巾約200m以内の細長い山間河谷の谷底平野が形成され、疊砂、泥が堆積している。

大野平遺跡は、須刈田部落の南西方約500m、崖錐性の段丘にある。（第1図版、第2図版）

(3) 大野平遺跡の地層（写真A）

第Ⅰ層

本層は、ゆるい傾斜地の耕地土壤で畑として利用されている。これは、黒色を呈し、腐植に富む土壤である。

第Ⅱa層・第Ⅱb層

本層は、黒色の土壤で火山灰起源の腐植質黒ボクグライ土壤（注）である。

第Ⅱa層・第Ⅱb層の鉱物組織は、偏光顕微鏡で観察すると、石英、黒雲母、磁鉄鉱や不透明の鉱物が認められる。（写真B）

この地層の試料を沈定法により2μ以下の粘土についてX線分析を行った。その結果は、石英、長石の他、粘土鉱物組成は、カオリン鉱物が主体で、緑泥石またはバーミキュライトと混合層鉱物からなる。（第4図）

第Ⅱc層

本層は、第Ⅱa層・第Ⅱb層の黒ボク土壤と第Ⅲ層との漸移層であり、不規則に混っている。

第Ⅲ層

本層は、黄褐色砂質土層（奥山 1961）とよばれた地層と同じもので、土壤母材は、若松山岩体を中心とする花崗閃綠岩である。

本層の砂粒を偏光顕微鏡で観察すると、母岩の風化による石英、磁鉄鉱、黒雲母や角閃石等が認められる。（写真B 5, 6）

本層の試料を沈定法により 2μ 以下の粘土をX線で分析すると、石英、長石の他、カオリン、バーミキュライト、雲母鉱物等を主成分粘土鉱物とする。（第4図）この粘土鉱物は、母岩である花崗閃綠岩の風化に由来するものと考えられる。（加藤 1965）

(4) まとめ

① 須刈田周辺の地質は、中生代白亜紀に貫入した花崗閃綠岩、石英閃綠岩よりなる。大野平遺跡は、崖縦性の段丘にある。

② 大野平遺跡の第Ⅱa層・第Ⅱb層は、火山灰起源の腐植質黒ボクグライ土壤である。粘土鉱物組成は、カオリン鉱物が主体で、緑泥石、バーミキュライトと混合層鉱物からなる。

③ 本遺跡の第Ⅲ層は、花崗閃綠岩の風化に由来する黄褐色の地層である。鉱物成分は、石英、磁鉄鉱、黒雲母、角閃石等よりなる。粘土鉱物は、カオリン、バーミキュライト、雲母鉱物を主成分とする。

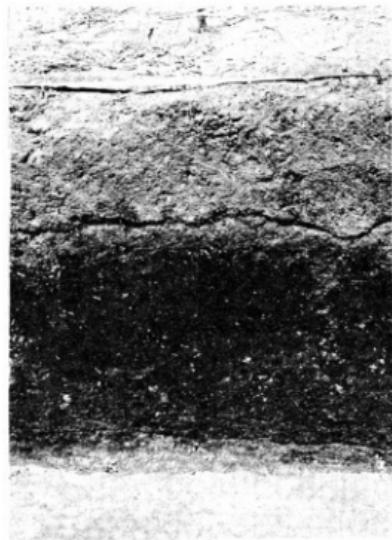
謝 辞

本調査をすすめるにあたり、東京工業大学浦部和順博士からは、粘土成分のX線回折と御鑑定をいただいた。また、山形県立農業試験場山口金栄氏からは、土壤について貴重な御助言を賜わった。以上の方々に深く感謝を申し上げる。

注 山口金栄氏の談話

文 献

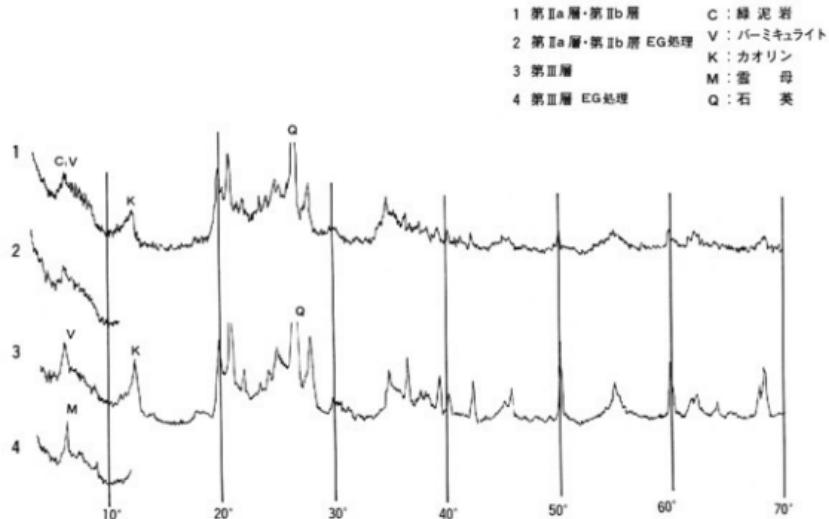
- 神保 惠・田宮良一 「5万分の1地質図幅「赤湯」および同説明書」 山形県 1972年
- 加藤芳朗 「花コウ岩の風化」 「粘土科学の進歩5」 P 125～136 1965年
- 北卓治・他 「山形吉野地域」 「昭和45年度広域調査報告書」 通商産業省 1966年
- 柴田 賢・矢崎清貴 「山形県長井市東方の石英閃綠岩のK—Ar年代」 「山形県地質誌」 P 173～175 1985年
- 菅井敬一郎 「山形県南端部の変成岩および花崗岩質岩のK—Ar年代」 「岩鉱 Vol. 71」 P 177～182 1976年



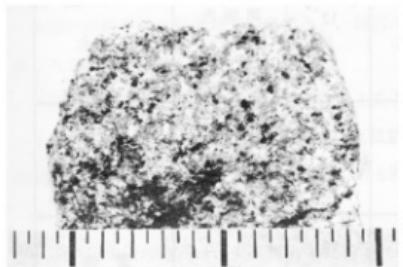
写真A 土層断面

層	層厚 (cm)	色調	その他
I	12 ↓ 28	黒褐色 ↓ 黑色	表土 (耕作土)
IIa IIb	13 ↓ 25	黑色	遺物
IIc	10 ↓ 20	黒褐色	遺物 遺構
III	—	黄褐色	遺構

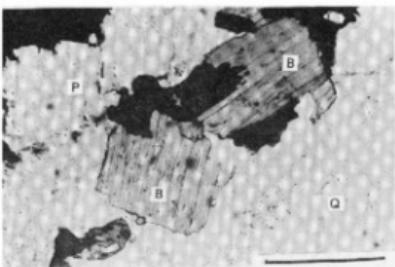
第3図 大野平遺跡の土層



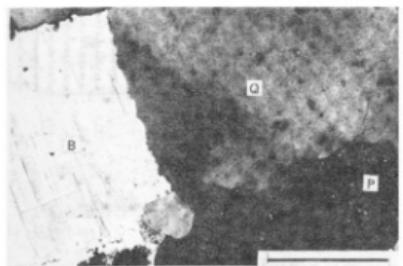
第4図 粘土鉱物のX線回折図



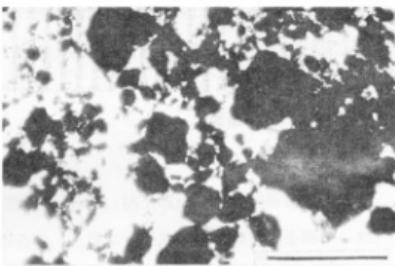
1 須刈田周辺に露出する花崗閃綠岩



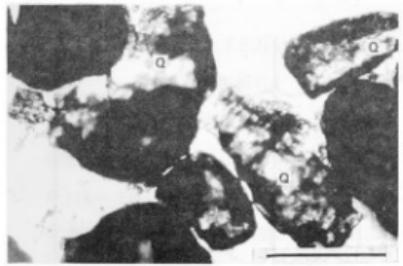
2 花崗閃綠岩



3 石英閃綠岩



4 第IIa・b層の鉱物



5 第III層の鉱物



6 第III層の鉱物

B:黒雲母 P:斜長石 Q:石英
印は0.5mm

写真B 各層の鉱物

第2章 調査に至る経過

本遺跡の発見は、昭和33年に溯る。南陽市（当時は東置賜郡宮内町）の大字漆山字須刈田に在住する本木繁美氏が、開墾作業中に、縄文土器や石器を発見したことに始まる。

本木氏の土器や石器を発見した場所一帯は、「鳥取場」と呼ばれ、季節毎に野鳥がたくさん集まる場所で、山間地にあっても、この付近だけはとりわけ陽当たりがよく、水もすぐに湧き出す、小さな盆地状の平地である。本木氏は、この平地の落葉林を開墾して、和梨や陸稲の畑にしたのである。昭和35年に調査に訪れた学生が、和梨の原種の成木林を見て大いに感ずるところがあったという。

本木氏による土器・石器の発見は、昭和33年からではあったが、昭和34年の発見が契機となって、人の知るところとなったものである。本木氏は、昭和34年11月と12月の二度にわたって、天童市（当時は高籠村）の桃井亀藏高籠中学校長を通じて、山形大学柏倉亮吉教授に、須刈田の大野平出土の土器・石器を鑑定してもらったのである。大半は縄文時代中期の土器や石器であったが、前期末葉の大木6式土器の破片が若干混じっていたのである。

当時は、縄文文化の研究が活気をおび、とりわけ中期以前の文化の解明に意欲を燃やしていたのが、県下の考古学的事情でもあった。とりわけ置賜地方では、高畠町日向洞穴をはじめとする岩陰遺跡群において縄文文化の始源追究がなされ、新聞等を賑わしていた頃であった。もちろん、本木氏もそのようなニュースに興味を抱いていた一人であったろう。

柏倉亮吉教授の着眼は、大木6式にあったようである（註1）。早速、柏倉教授によって置賜地方における縄文時代前期文化の解明というテーマに沿った現地調査が企画されたのである。しかし、昭和35年5月、現地調査のため須刈田の本木氏宅を訪れた調査団（柏倉亮吉教授、赤塚長一郎氏、山形大学学生14名、国学院大学学生佐々木洋治氏、武田好吉氏、宮内郷土史研究会員他）が、目にしたもののは、さらに古い縄文時代早期中葉の田戸下層式・子母口式・同早期末葉の茅山式並行期の土器片であった。

当時の県内の考古学は、遊佐町吹浦遺跡、天童市上荒谷遺跡、山形市大森遺跡、高畠町各岩陰遺跡、川西町相馬山遺跡、飯豊町野川遺跡などの調査による縄文時代前期文化の追究も軌道にのっていたが、尾花沢市細野遺跡、村山市山ノ内遺跡、土生田遺跡、三カノ瀬遺跡などの調査による縄文時代早期文化の追究も軌道にのっていた頃であった。そして前述の通り高畠町の日向洞穴をはじめとする岩陰遺跡群の調査によって縄文時代草創期文化の追究も一段落を迎えていた頃でもあった。しかしながら、前期にしても、早期にしても、また草創期にしても、未解決の問題が多く、置賜北部から庄内南部にかけての空白域もあり、まだまだ研究に意欲を燃やしていたときであった。それで、調査団の大野平遺跡に対する興味関心は、計画段階に倍して高まったといわれる。

山大調査団による発掘調査は、昭和35年5月と8月の2回に及んだ。この調査を調査のあり方か

らして第1次発掘調査と呼ぼう。第1次調査の結果、後述する通り縄文時代早期と前期の住居跡を各々1棟、早期・前期・中期の縄文式土器や石器を検出したことは、当時の縄文文化研究に大きく寄与するところがあったことはいうまでもない。その後、柏倉亮吉教授によって、昭和35年度、昭和36年度の山形県総合学術調査会に報告され、昭和44年の山形県史資料11篇「考古資料」に大きくとり上げられている。とりわけ住居跡内出土の尖底深鉢は、本県における田戸下層式並行期の代表的なものとして位置づけられている。

さて、発掘調査時の喧噪から静寂をとりもどした遺跡を耕作する本木繁美氏は、よき後継者を得ていた。息子の辰雄氏である。本木辰雄氏は、耕作しながら、常にこの遺跡のことを考えていた。どうしたら、この遺跡を保存し、より多くの人々に活用してもらえるか。その日があることを予想して、どんなことがあっても遺跡が壊れないように耕作してきた。耕作のかたわら、出てきた土器や石器を丹念に収集保管をしてきた。本木辰雄氏の願いは隣接の耕作者、さらに須刈田地区、そして漆山地域全体へと通じてきている。漆山地区の文化祭に大野平遺跡出土の土器や石器が展示され、市民の反響を呼んだこともある。また、遺跡を見おろす北の山に「大野平キャンプ場」がつくられ、活用されている。今では、市営大野平キャンプ場の標識と共に大野平遺跡の標識が建てられ、いく分かの前進を見ている。

南陽市教育委員会は、市史編さん事業の立場からこの遺跡の重要性を認め、昭和57年度から調査を進めてきている。昭和57年度は、本木氏所蔵の出土遺物の調査記録、山大所蔵の出土遺物の調査記録を開始した。昭和58年度は、遺跡の状況を現地調査した。昭和59年度は、第二次の学術調査を計画した。開発に伴う緊急調査とは異なる性格であるため、県内の研究者を集め、その協力を得て行う調査団体制を組んで調査を進めることになった。遺跡の保護のため、市史編さん発展のため、考古学研究の発展のためという各々の立場からの目的が一つに合体した調査を企画したものである。

本木氏が、これまでに収集保管してきた遺物が多い。以下にその概要を述べる。

土器

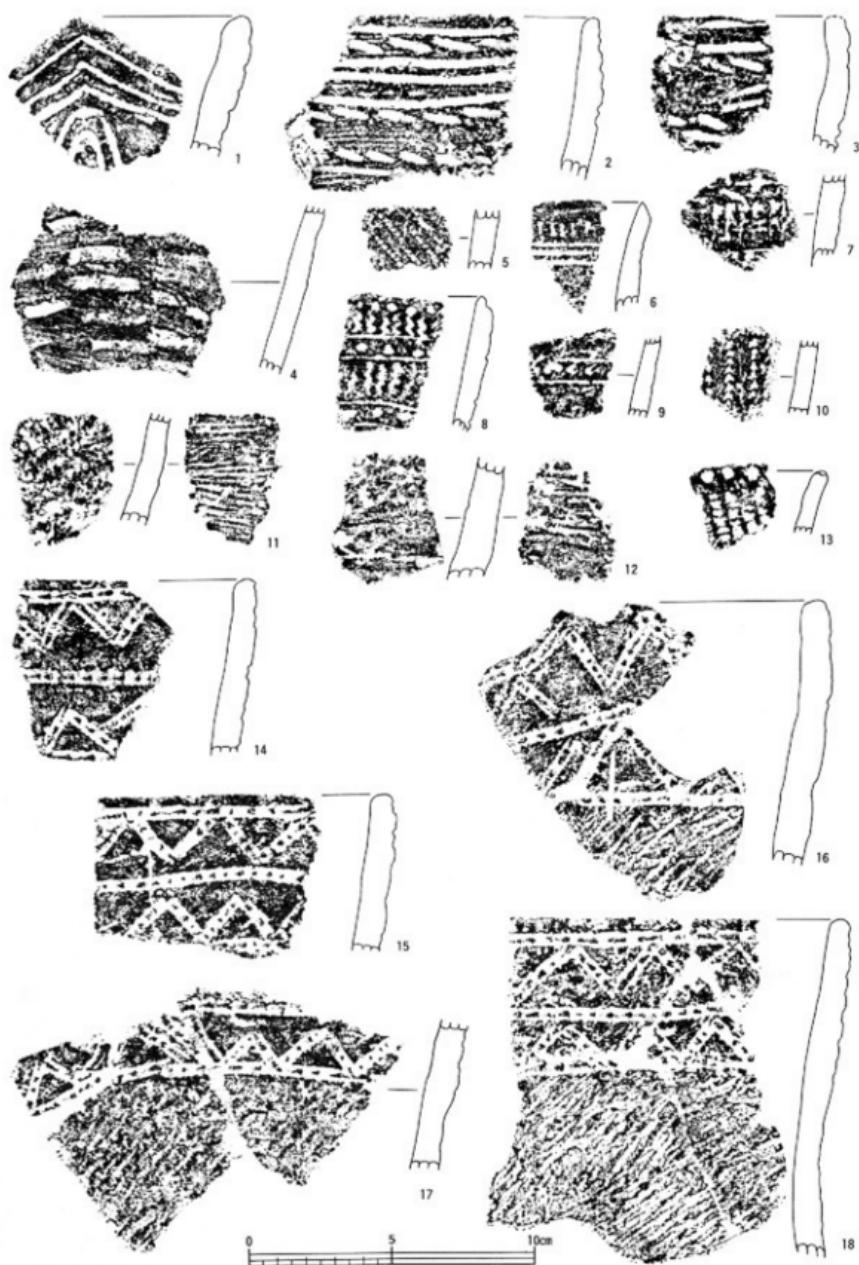
235点ある。いずれも破片であるが、文様特徴の明瞭な、大きな破片が多い。

第1類 貝殻沈線文土器群の仲間で、沈線文や刺突文を有するもの。（第3図版1～4、第5図1～4）

胎土には砂粒を含み、器壁は薄く、繊維の混入はない。沈線文や刺突文を有することが特徴的で、関東地方の田戸下層式に対比されるものである。

第2類 貝殻沈線文土器群の仲間で、やや細い沈線文や連続刺突文を有するもの。（第3図版5～10、第5図5～10）

胎土には砂粒を含み、繊維の混入はない。細い沈線文や連続刺突文を有するのが特徴的で、関東



第5図 木氏权集土器(1)

地方の田戸上層式並行の明神裏Ⅲ式および常世2式に対比される。

第3類 表裏条痕文土器群の仲間で、表裏に条痕文を有するもの。（第3図版11～12、第5図11～12）

胎土に砂粒・雲母などを含み、やや器壁が厚く、繊維が混入している。表裏に条痕文を有するのが特徴的で、関東地方の鶴ヶ島台式に対比される縄文時代早期末葉の土器とみられるものである。

第4類 縄文条痕文を有するもの。

胎土には砂粒や雲母、繊維を含み、器壁はやや薄い。表面に条痕文を施し、さらに縄文を施している。関東地方縄文時代早期末葉の茅山上層式および仙台湾周辺の素山Ⅱb式・上川名Ⅰ式に対比されるものである。

第5類 短縄文を有するもの。（第3図版13、第5図13）

胎土に砂粒・雲母・繊維を含む。短原体による縄文を有する。仙台湾周辺の縄文時代前期初頭の上川名Ⅱ式に対比されるものである。

第6類 竹管文に特徴されるもの。(第3図版14～21、第4図版1～4、第5図14～18、第6図1～7)

胎土には、石英・白色粒子を含み、器壁はやや厚い。撚糸文の地文に加えられた細い竹管文による平行線文や鋸歯状文が特徴的である。縄文時代前期末葉の大木6式に相当するものである。

第7類 竹管文や撚糸圧痕文を有するもの。（第4図版5～9、第6図8～12）

胎土には、石英、白粒、雲母を含み、器壁はやや厚い。地文はLR単節の斜縄文で、横位の結節を有する。キャリバー形に近い口縁部周辺は横位の文様帶があり、竹管文による平行沈線文によって区画をなした中に、竹管文による格子状、平行線状の文様を充填している。口唇部周辺の隆帶には撚糸圧痕を加えて充填している。縄文時代中期初頭の関東地方五領ヶ台式の仲間である、北越地方の新崎式に相当するものである。

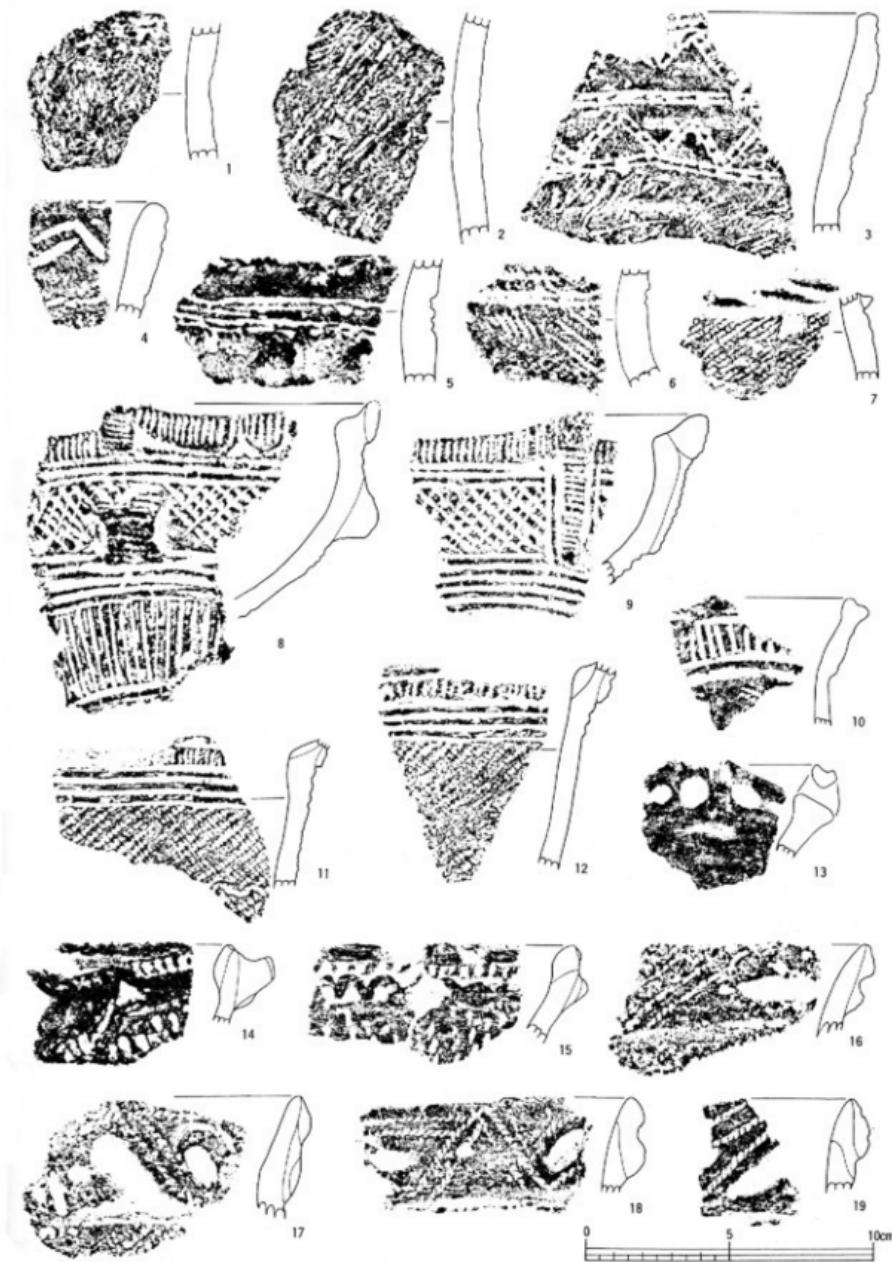
第8類 撥糸圧痕文や刺突文を有するもの。（第4図版11～19、第6図14～19、第7図1～3）

胎土には、石英や白粒などの砂粒を含み、器壁は厚手のものが多くなる。口縁はほとんど隆帶状になる複合口縁の手法を用い、指のような工具で沈線を加えたり、撚糸圧痕文を施したりするもの、太い沈線文による区画の中に交互刺突文を加えたりするものがみられる。体部は斜縄文を加えている。大木7b式相当のものである。

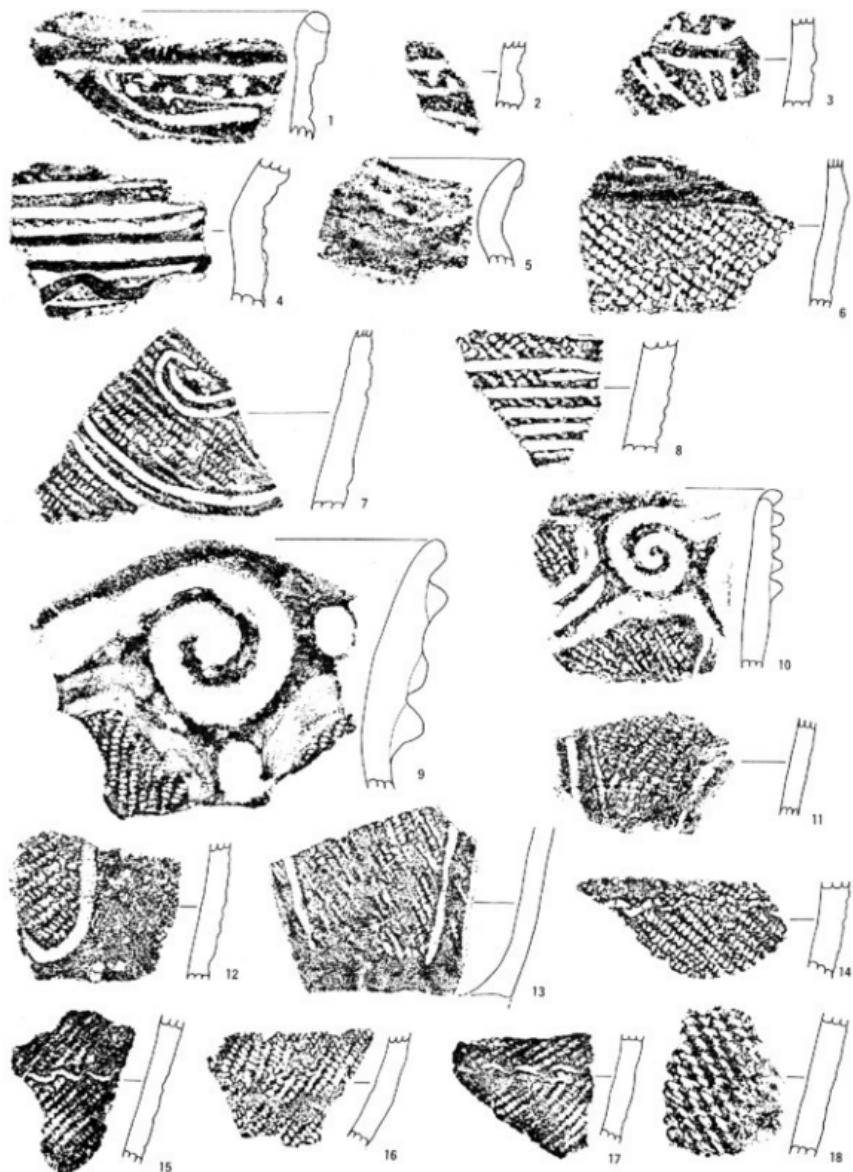
第9類 漪巻文を有するもの。（第5図版1～8、第7図4～11）

胎土には白粒や雲母などが含まれ、器壁は厚い。口縁部に隆線が発達し、渦巻文が施されている。また、口縁部文様帶から体部文様帶にかけて、太い平行沈線文や渦巻沈線文が施されている。縄文時代中期中葉の大木8a式、一部は大木8b式に相当するものである。

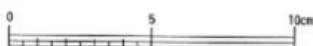
第10類 磨消縄文を有するもの。（第5図版9～10、第7図12～13）



第6図 本木氏収集土器(2)



第7図 木本氏収集土器(3)



胎土には白粒や雲母を含み、器壁はやや薄手である。隆帯や隆線文ではなく、沈線区画による磨消縄文がみられる。断片的であるが、磨消縄文の形態からみて、縄文時代中期末葉の大木10a式に相当するものとみられる。

他に斜縄文を有する体部破片や底部がある。体部破片の斜縄文には、縦位および縦斜位の施文による単節・複節の斜縄文、横位の結節を有する単節斜縄文がみられる。これらは第7類～第10類に伴うものとみられる。底部は破片のみである。無文平底がほとんどで、網代底は1点のみである。これらも器質からみて第7類～第10類のものがほとんどである。

石器

石器と剝片で477点ある。260点の石器では定形をなすものが多く、217点の剝片は細かなもののが含まれず、また石核も含まれていない。石材は、珪質頁岩・砂岩・安山岩・花崗岩を用い、置賜地方に産出する岩石である。

石錐（第6図版1～26、第8図1～8）

35点ある。材質は、大部分が珪質頁岩であるが、珪岩や砂岩のものを含む。形態は多様で、各時期のものを含んでいるとみられる。分類すると、次の6類の形態がある。

第1類 無茎で長脚形のもの。（第6図版1・5～7、第8図1）

第2類 無茎で抉入形のもの。（第6図版2～4・8～11、第8図2～3）

第3類 無茎平基で長五角形のもの。（第6図版12～16・21、第8図4～5）

第4類 無茎平基で2等辺3角形のもの。（第6図版17～20）

第5類 有茎平基で2等辺3角形のもの。（第6図版22、第8図6）

第6類 有茎のアメリカ型のもの。（第6図版23～26、第8図7～8）

第1類～第3類は縄文時代早期～前期に多い。第1類～第5類は、早期～中期のものとみられる。第6類は、いわゆるアメリカ型石錐で弥生時代のものといわれているが、弥生式土器とみられる土器は確認されていない。

石錐（第6図版27～28、第7図版27～28、第8図13）

4点ある。材質は珪質頁岩である。いずれも錐部の断面は菱形を呈する。つまみ部の小さなものが1点あるが、他はつまみ部が広がるものである。

石匙（第6図版29～49、第8図10～12・14～19、第9図1）

24点ある。材質は珪質頁岩である。形態も大きさも多様である。各時期のものを含んでいるとみられる。分類すると、次の6類に分けられる。

第1類 両面加工の短剣状のもの。（第6図版29～31、第8図10～12）

- 第2類 片面加工の石小刀状のもの。（第6図版32～36、第8図14・16・19）
- 第3類 片面加工の切出しナイフ状のもの。（第6図版37～38、第8図15）
- 第4類 片面加工の包丁状のもの。（第6図版39～40・42～44・49、第8図17、第9図1）
- 第5類 片面加工の角ノミ状のもの。（第6図版41、第8図18）
- 第6類 片面加工の横形のもの。（第6図版45～48）

第1類のみ両面加工で、つまみ部さえなければ尖頭器・槍・劍のような機能を果たすことで、他の5類とは異質のものである。第2類～第5類は、いわゆる縦形石匙で、第6類は横形石匙である。数的には縦形が圧倒的に多く、早期～中期の縄文時代前半各時期にみられるものである。

籠状石器（第7図版1～23、第8図版1～24、第9図版1～6、第9図2～12）

81点である。石材はすべて珪質頁岩である。各時期のものを含むためか、多様な形態を示す。5類に分類される。

- 第1類 細長方形で、両面加工の片刃のもの。平刃である。（第7図版6～8、第9図2～4）

- 第2類 やや不定形に近い長台形で、片面加工の片刃のもの。円刃である。（第7図版1～5・9～23、第9図版1～6）

- 第3類 長台形で、片面加工の片刃のもの。平刃である。（第8図版1～3・5・7～13・16、第9図8～11）

- 第4類 長三角形で、片面加工の片刃のものである。円刃である。（第8図版15・17～24、第9図5・12）

- 第5類 長台形で、片面加工が顕著な片刃のもの。平刃である。（第8図版4・6、第9図6～7）

第1類のみ、ていねいな両面加工の、いわゆる石鎧というよりは石斧的なものである。第5類も第1類と同じく石斧的なものである。しかし、第1類と第5類とでは大きな差違がある。いずれも縄文時代早期～中期のもの。

搔器（第7図版24～26、第9図版7～15）

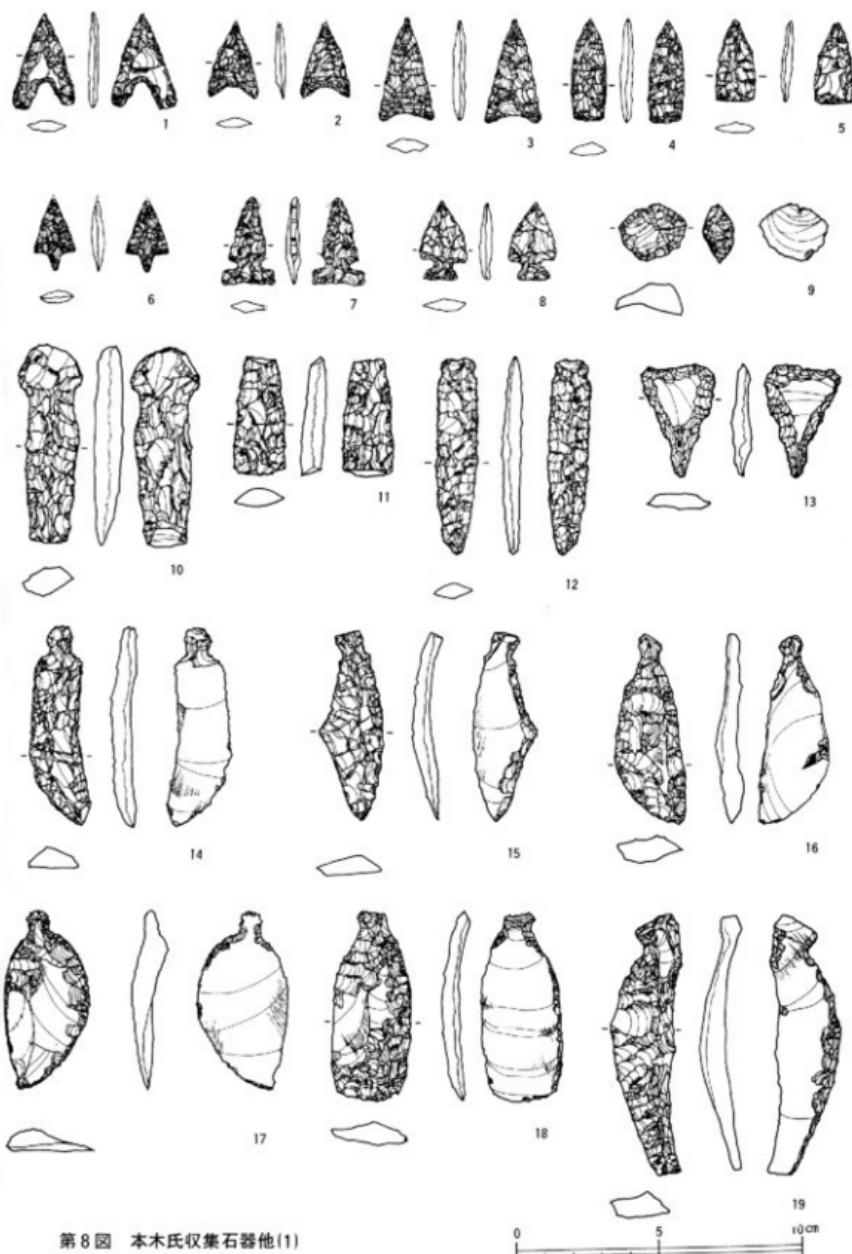
12点である。いずれも珪質頁岩を材質とする。つまみ部がつけば、縦形石匙・横形石匙ともいえるもので、刃部が幅広く周っている。いずれも片面加工である。縄文時代前期～中期に多い形態である。

剣片

217点ある。いずれも珪質頁岩である。整形しないで使用したともみられる使用痕のあるものもわずかに含む。

磨製石斧（第9図版16～20）

5点ある。砂岩を石材としている。いずれも破片で、折損しているが、折れ方は一定している。偏平な擦切磨製石斧である。



第8図 本木氏収集石器他(1)

敲石（たたきいし）（第10図版1～20、第11図版1～19、第13図版13～15・19～20）

44点ある。いずれも流紋岩や砂岩を石材としている。長さ10cm前後の棒状河原石の先端を利用している。硬いものを敲打して、先端が欠けたものは明瞭であるが、柔らかいものを敲打したのか、欠損も目立たず、不明瞭なものもある。また、敲打^すの他に磨り痕・擦痕が見えるものもある。

2類に分けられる。第1類は、細身の長芋状のものである（第10図版1～20）。自然の河原石をそのまま利用したものである。折損がみられる。第2類は、やや太身の棒状河原石を利用した。先端の平らなもの（第11図版1～19、第13図版13～15・19～20）。自然の河原石状態で先端が平らなものは、加工を加えていないが、そうでないものは敲打面をつくるため、平らに加工している。太身であるため、磨石として使用したものもある。第2類は、早期に特徴的なスタンプ状石器に類似している。

石皿（第10図版22～23）

2点ある。いずれも破片である。流紋岩を材質としている。長方形に近い形をしているとみられ、脚などはついていない。

磨石（第12図版1～18）

34点ある。石材は流紋岩・砂岩・花崗閃緑岩を用いている。いずれもこぶし大の偏平な円形を呈する。全面にわたってよく磨られている。中には、二次使用として凹石に転用されているもの（10～18）があり、特徴的である。

凹石（第13図版1～12・16～18）

18点ある。流紋岩や砂岩を石材としている。いずれも10cm前後の敲石と同様の河原石を利用して、敲石を二次的に転用したものもある。凹穴も大きいものと小さくわずかに凹むものとがあり、多穴のものと単穴のものがある。

分銅形石器（第10図版24）

1点のみで、砂岩を石材とする。全面よく研磨されて整形されている。全体として分銅形で、上部に二重の、浅く太い溝がめぐっている。用途は不明だが、非常に珍らしい石器である。

（註1） 奥山忠彦「宮内町須刈田大野平遺跡調査概報」『山形考古』第8号

山形考古友の会 1961年



第9図 本木氏仅集石器他(2)

第3章 第1次調査の概要

第1次調査に至る経過は、第2章で述べた通りである。本章では調査体制以下調査結果に至る概要を述べる。

調査体制は、次の通りである。

調査主体

主催……山形県総合学術調査会

共催……宮内町教育委員会、山形新聞社

調査班

調査主任 柏倉亮吉（山形大学教授）

調査副主任 武田好吉（山形県文化財専門委員）

調査員 赤塚長一郎（山形大学O.B.）

山形大学学生 14名

国学院大学生 1名

協力員 木木繁美・木木辰雄（以上地主）

宮内郷土史研究会会員

宮内公民館職員

須刈田地区民

調査期間は、昭和35年5月18日～19日、8月23日～25日の5日間である。

調査区域は、3地点にまたがる。第1地点は、遺跡の中央部に位置し、当時の現況は陸稲畠である。第2地点は、その北東に隣接する陸稲畠である。第3地点は、遺跡の西側にある孟山の下に繁る落葉広葉樹林の近くで、第1地点の西方約40mの陸稲畠である。当時の詳しい測量図がないため、第2次調査時の測量図に地点名を入れたので、第2図を参照されたい（第14図版～15図版）。

調査の結果は、以下の通りである。

(1) 層序と遺物分布

第1地点より縄文時代早期中葉の住居跡1棟、第2地点からは遺構は検出されなかったが、第3地点より縄文時代前中期葉の住居跡1棟を検出し、それぞれ各時期の土器や石器を多数採集した。

第1地点から第3地点に至る地形は、遺跡の立地する平地が、南方より流れる小河川の土砂堆積により形成されているため、小丘状地状の傾斜がある。第1地点が中央にあって、他地点より高い。第2地点はそれより端に寄るために、第1地点よりやや低い。第3地点は、さらに端に寄るために、さらに低い。したがって、層序関係もそれに対応する。第1層の表土層（耕作土層）は黒

色土層で、第1地点12cm・第3地点28cmであり、第2地点はその中間の厚さである。第II層の黒色土層は、第1地点23cm・第2地点23cm・第3地点22cmの厚さで、ほとんど同じ厚さである(第10図)。

遺物包含層は第II層で、遺構である2棟の住居跡は、いずれも第III層の黄褐色砂質土層を掘り込んでつくられていた。第1地点の第II層および住居跡からは、田戸下層式、子母口式、茅山式並行期の土器および石器が出土している(註1)。第2地点の第II層からも同時期の土器や石器が出土している。第3地点の第II層および住居跡からは、大木6~8式の土器や石器が出土している。

(2) 出土構

第1地点発見住居跡(第1号住居跡)(第11図 第15図版)

遺構確認面は第III層上部で、地山の第III層を掘り込んで床面を形成している。第II層下部から掘り込まれた竪穴住居跡とみられるが、壁は明確に検出できなかった。柱穴の配列はおおむね東西3m×南北3.3mのほぼ方形に近い。方形の平面プランを有するとみられる。

柱穴は、径17~27cm、深さ6~17cm程度のもので17個ある。径20cm×深さ12cm程度のものが多い。配列をみると壁近くに柱をめぐらす構造の上屋が推定される。

床面の中央には掘込炉があり、南北1m×東西1.3mの略円形の平面プランを呈している。その中央部に深さ20cm×径40cmの略円形の穴があり、こぶし大の花崗閃緑岩礫が8ヶ、その縁にそって配列されていた。その中央の穴に田戸下層式並行期の尖底深鉢(第13図第15図版)が横倒しの状態で発見された。このことから、本住居跡の年代を縄文時代早期田戸下層式並行期と推定することができる。

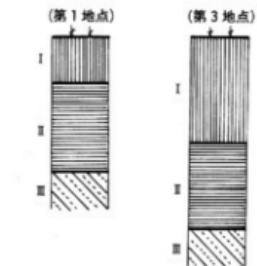
第3地点発見住居跡(第2号住居跡)(第12図)

遺構確認面は第III層上部で、地山の第III層を掘り込んで床面を形成している。第II層下部から掘り込まれた竪穴住居跡とみられるが、壁を明確に検出し得なかった。柱間の配列はおおむね東西2.4m×南北2.4mの方形で、方形の平面プランを有するとみられる。

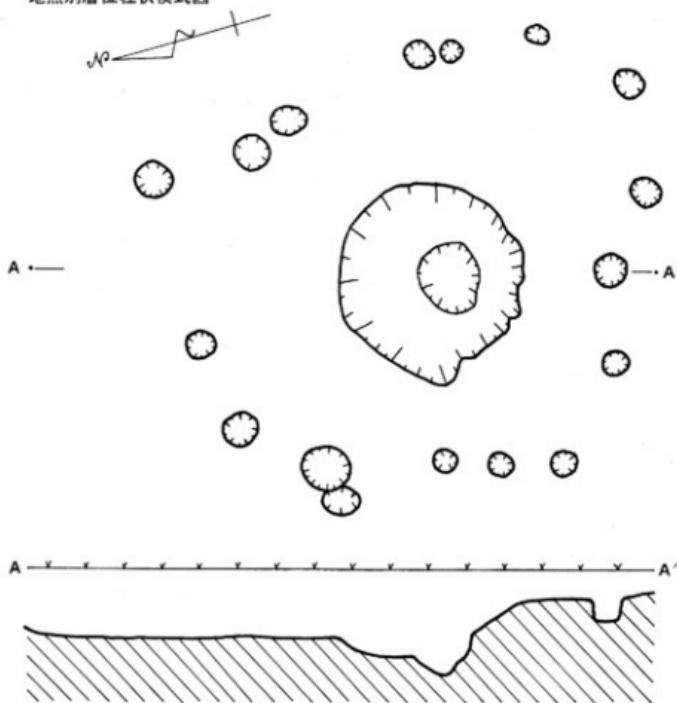
柱穴は径15~25cm、深さ10~20cmのもので、12個ある。平均して径20cm×深さ15cm程度である。配列からみて方形の上屋を推測し得る。

床面の中央に略円形の径1m規模の炉跡がある。炉内には焼土が厚く堆積し、固く焼きしまっていた。地面を掘りくぼめるとか、石で開うとかの構造ではなく、床面をそのまま炉として用いた地床炉と考えられる。

住居跡内覆土からは、縄文時代前期末葉大木6式土器、中期初頭大木7式土器、中期中葉大木8式土器の破片が検出された。床面直上から大木6式土器の破片と石鐵1点、石匙5点が検出された。したがって、本住居跡の年代を大木6式期と推定することができる。

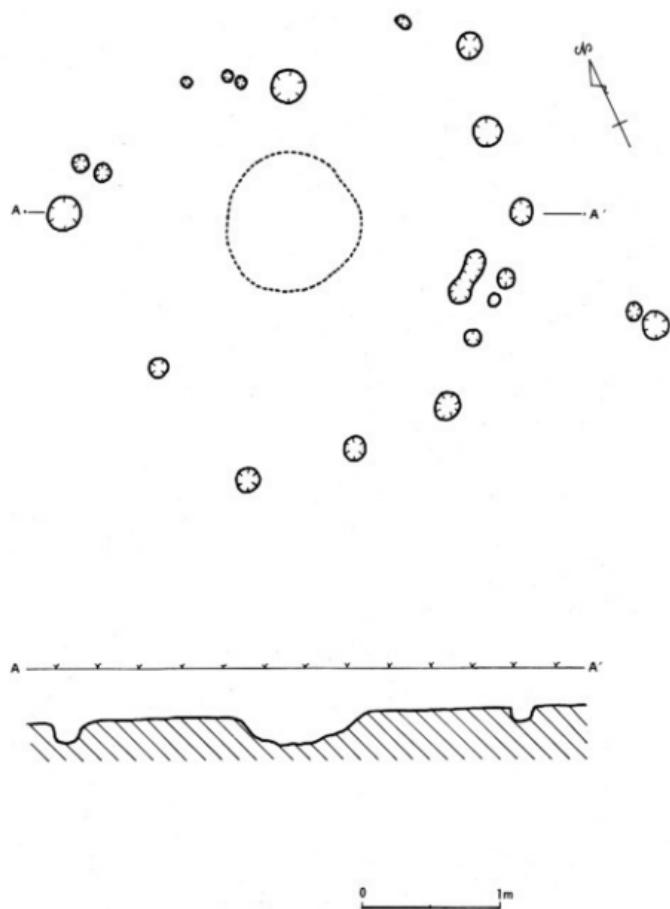


第10図 第1次調査
地点別層位柱状模式図



第11図 第1次調査第1号住居跡

0 1m



第12図 第1次調査第2号住居跡

(3) 出土遺物

土器

第1類 沈線文土器 (第13図、第14図1~2・5、第15図版)

第13図は、第1地点発見住居跡より出土した尖底深鉢である。口唇が急に薄くなり、口縁はゆるい波状をなす。頸部でややしまって胴部で少々張り出し、鋭角な尖り底をもつ。赤褐色で、厚さ7~8mm。文様は、器面にあらい擦痕を施し、その上に太い沈線文を施している。横、斜め方向に抉りとったような状態、短かく切れた状態で底部近くまで器面をめぐる。関東地方の田戸下層式に並行するとみられる。

第2類 貝殻沈線文土器 (第14図3~4)

小破片で不明瞭であるが、貝殻沈線文、貝殻刺突文を有する。調査時には、関東地方の子母口式並行としたが、大寺下層式・明神裏Ⅲ式などの東北南半の土器群に類似する。

第3類 貝殻条痕文土器

器表裏面に縄文条痕文を有するもので、調査時には茅山式(関東地方)並行としたものである。現在では、むしろ鶴ヶ島台式に類似しているとみられる。

第4類 太い沈線文・撚糸圧痕文土器 (第14図6~7)

胎土に纖維を含み、口縁部周辺に平行に横走する太い沈線文を施し、撚糸圧痕文を加えたもの。東北南半の上川名Ⅱ式に類似する。

第5類 ボタン状突起を有する太い沈線文を有する土器 (第14図8~9)

厚手の口縁に、太い沈線文・円棒状突刺文・ボタン状突起を有する。大木5式に相当する。

第6類 竹管文を有するもの (第14図10~11)

撚糸文を地文とし、その上に鋸歯状などの竹管文を加えたものである。大木6式に相当する。

第7類 竹管文・撚糸圧痕文を有するもの (第15図1~12、第16図1~10)

隆帶をめぐらす口縁部に、太い工具による刺突文や撚糸圧痕文を施したりする。また、竹管文による区画に撚糸圧痕文を有する。体部には横位の単節の斜縄文を施し、さらに縦位撚糸圧痕文を加えるものがある。網代底もみられる。大木7a式も一部あるが、同7b式がほとんどである。

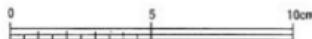
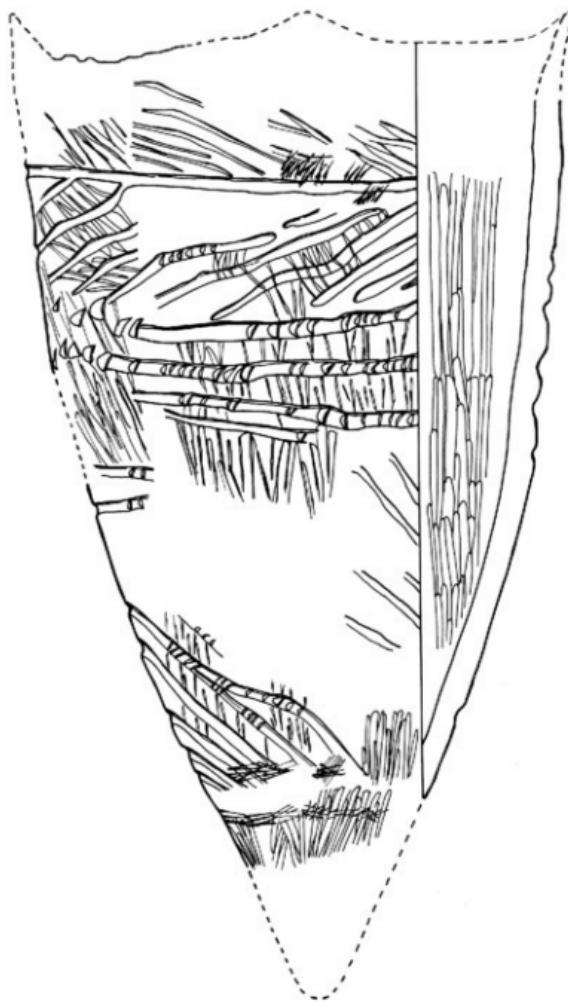
第8類 隆起線文による渦巻文を有するもの

キャリバー形の器形に、隆起線文による渦巻文等を有する。一部沈線文による渦巻文等をも含む。大木8a式に相当する。

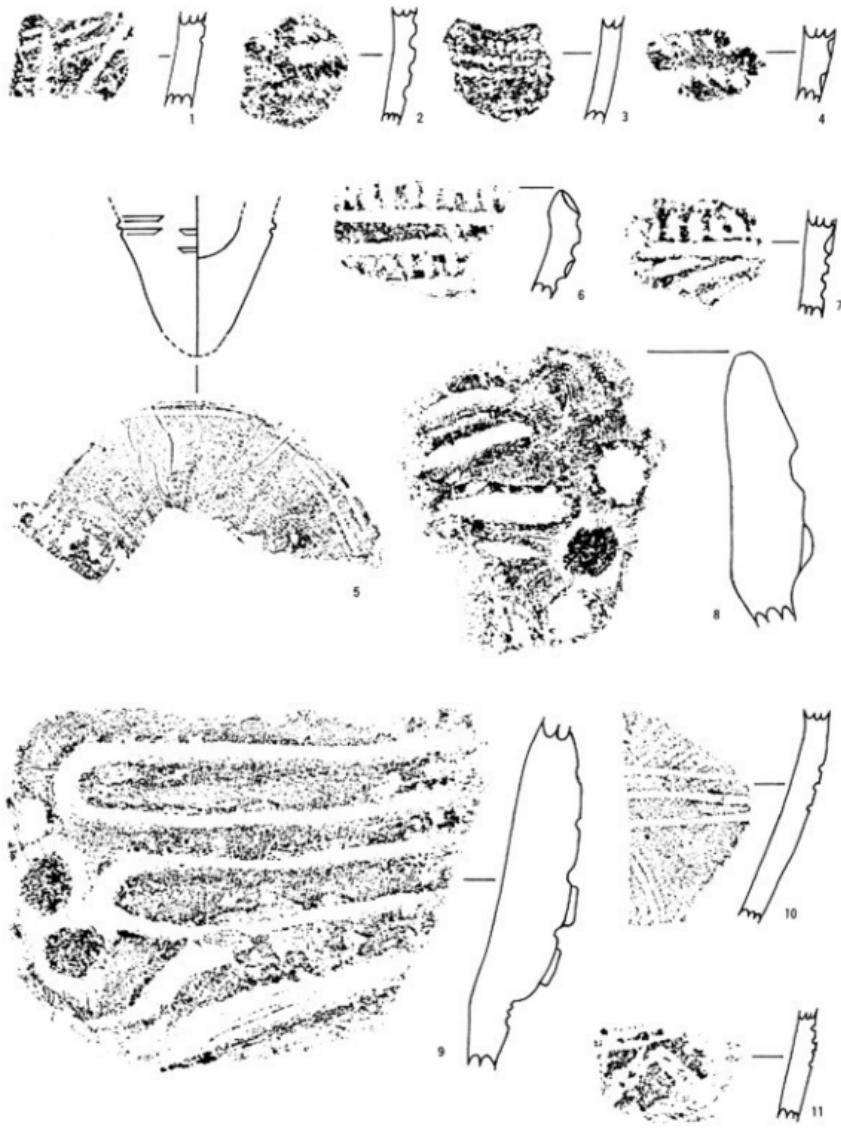
石器

石鏃・石匙・石籠・搔器・磨石・凹石・敲石がある。その他に拇指状搔器(第8図9)がある。本遺跡では少ない。その他に剥片石器(第9図13)や剥片がある。

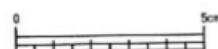
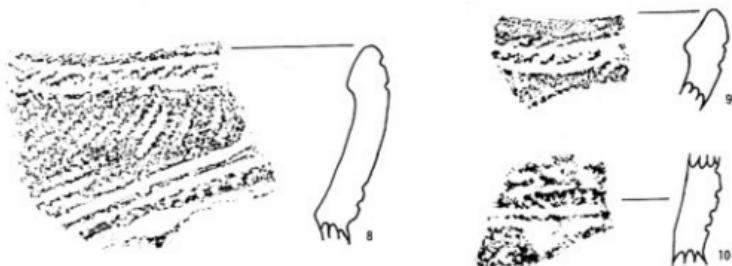
註1 奥山忠彦「宮内町須刈田大野平遺跡調査概報」『山形考古』第8号 山形考古友の会 1961年



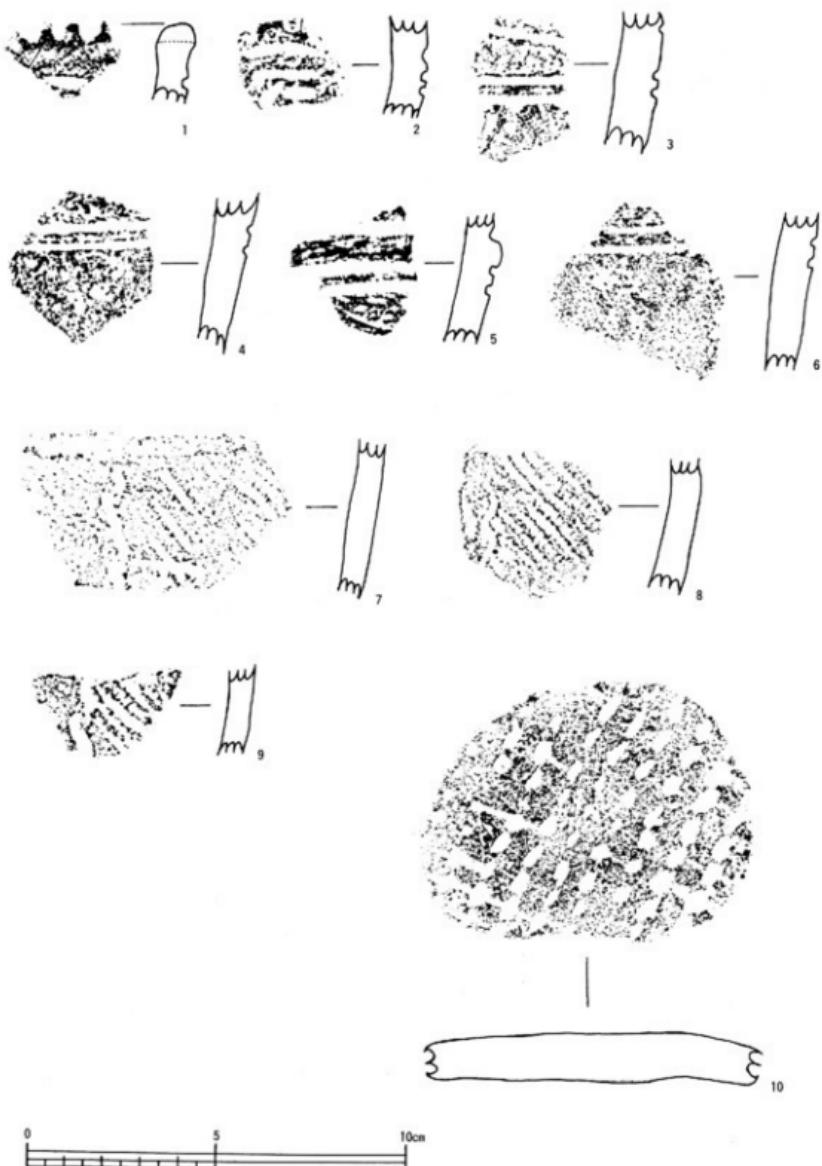
第13図 第1次調査出土土器(1)



第14図 第1次調査出土土器(2)



第15図 第1次調査出土土器(3)



第16図 第1次調査出土土器(4)

第4章 第2次調査の経緯

昭和59年度、加藤稔・佐藤鎮雄両名を発起人として、調査団趣意書、同要綱、調査要綱をもって、県内の縄文文化研究者に調査団のよびかけがなされた。

一方、8月上旬の調査をめざして、基礎的な準備作業も行なわれた。

調査地点を選定するため、6月4日、5日の両日、試掘（坪掘り）と現地確認を含む予備調査を行った。試掘調査地点は、未調査区域のうちで、作付けしておらず、しかも遺物等の多く出土している所とするため、本木辰雄氏から情報を得ると共に、同じく地権者の本木勝清氏からもご協力を得て範囲を定め、第17図の71～100—49～90G、81～100—41～50G、91～100—31～40Gにあたる地域に、25か所試掘を行った。その結果91～100—31～50Gの範囲において特に遺物が多く、しかも遺構も検出されたため、調査区とすることになった。

また、地形測量を7月16日～24日の内6日間行った（第2図）。はじめに骨組測量をトラバース測量法により行い、図根点16か所を設けた。標高は、本遺跡南東約1.5kmの山頂にある三角点522.6mから導いた。細部測量は、スタジア測量により行った。等高線間隔は1mとし、原図縮尺は $1:500$ とした。

さて、調査団結成の呼びかけにより、参加者が決定し、7月22日に調査検討会が開かれた。検討会では、調査日程、方法、役割分担、遺物整理等について話し合われた。なお、調査期間は8月1日～12日までとし、12日に現地説明会を行うこととした。また、宿舎を市内宮内の市立修道館に定めた。

調査開始日に向けて、宿舎の設営、器材搬入、および発掘区周辺のグリッド杭打ちを行った。グリッドは、2m×2mを1単位とし、遺跡内を南東から北西に直線的に貫く境界標石柱にあわせてY軸を設定することとした。Y軸はN-28°20'-Wを測る。発掘区に最も近い石柱を基準として（100-50G）X軸を設定した。また各グリッドは北西コーナーの番号をもって代表させることとした。

調査の経過

8月1日（水）午前中は、作業の準備と修祓式を行う。精査区は、試掘時に遺構、遺物が認められた地点を基に、99～100—43G、98—41～44Gの6グリッドとし、午後から人力により表土（第I層）剥離を開始した。第I層の遺物はグリッド毎に一括して取りあげ、遺物出土地点記録は第II層から行った。以後全遺物の記録をとりつつ精査をすすめ、遺構検出をめざした。

8月2日（木） 98—43Gにて、S X 1のプランを確認。試掘時のテストピットを再掘し、S T 2内の石組遺構を確認した。

8月3日（金）、4日（土） 遺物の記録を取りつつ掘り下げる作業を行う。

8月5日（日） 石組遺構が住居跡に伴う可能性を考え、100～99-44Gの2グリッドを拡張した。また、98-41～42Gのボーリング探査等を行い、遺構の把握をめざした。

8月6日（月） 拡張区を既掘レベルまで掘り下げた。

8月7日（火）～8日（水） SX1以外の遺構確認が難しいため、サブトレンチを設けた。

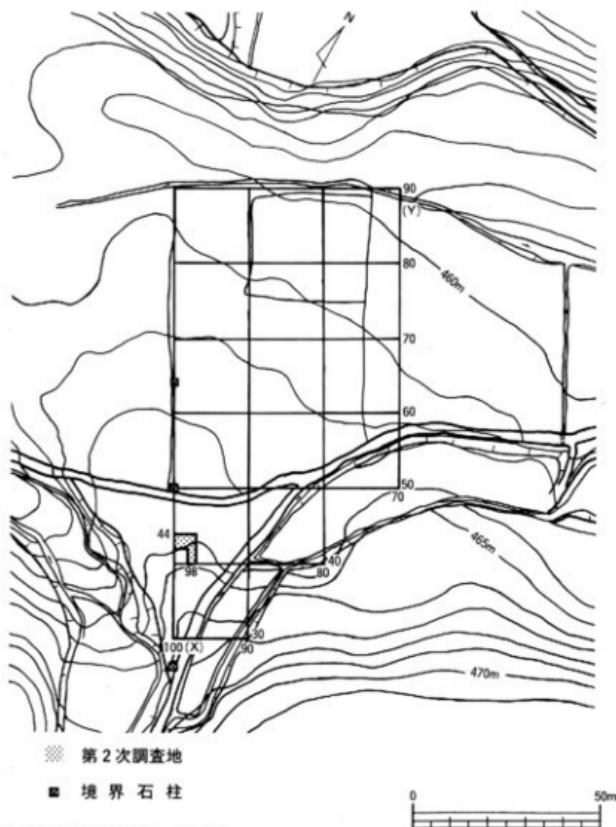
8月9日（木）～10日（金） ST1のプランを確認し、掘り下げるとともに、ST2は、石組遺構付近から床と壁を検出はじめた。

8月11日（土） SX1を半截し、土層を記録。ST1, ST2とともにほぼ掘りあげた。

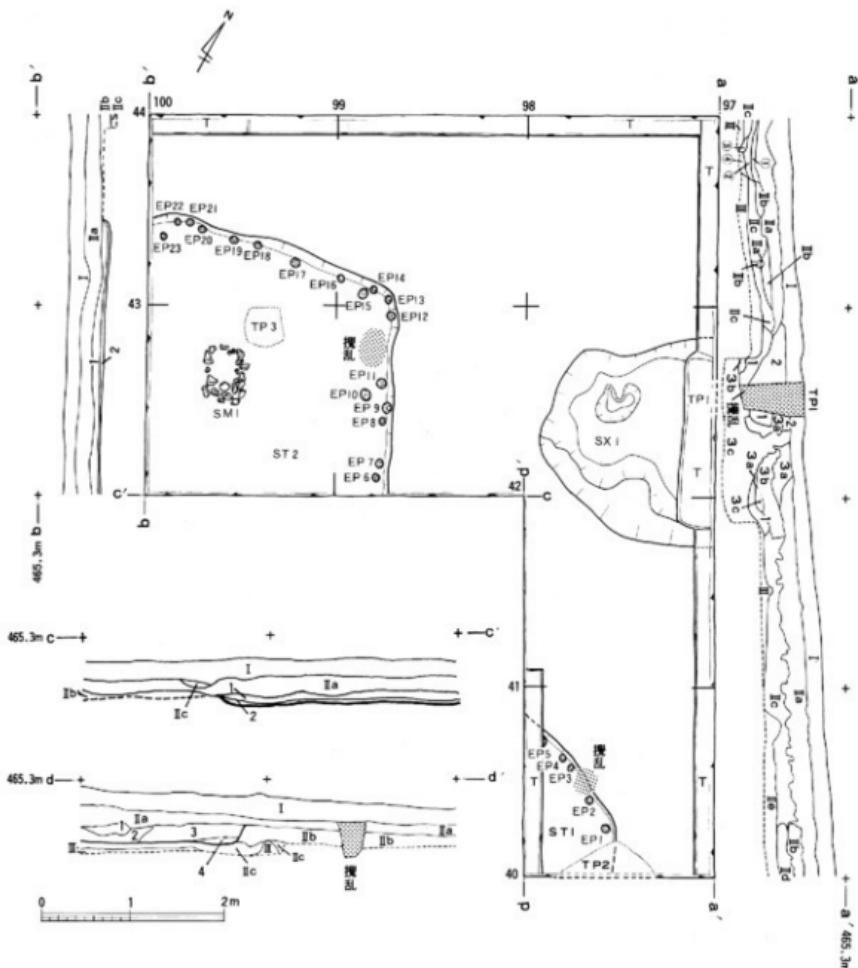
8月12日（日） 調査地内の遺構を掘りあげ、写真撮影を行う。10時から現地説明会を実施。午後から器材撤収にかかる。あわせて、遺構平面図その他の作成。

8月13日（月） 一部残務の整理。

8月下旬、本木辰雄氏の協力を得、人力と重機により埋め戻し作業を行った。



第17図 第2次調査グリッド配図



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
I	黒褐色 (10YR 1/2)	砂質土	耕作土、粘性大	Ie	黒褐色 (10YR 1/2)	砂質土	粘性大、黒雲母片を少量含む
Ia	黒褐色 (10YR 1/2)	砂質土	0.2~4mmの砂粒を若干含む	II	黄褐色 (10YR 5/6)	砂質土	地山
IIa	暗褐色 (10YR 5/6)	砂質土	0.2~4mmの砂粒の混入多し	(1)	黒褐色 (10YR 5/6)	砂質土	粘性大、砂粒を含む
IIb	暗褐色 (10YR 5/6)	砂質土	砂粒 (0.2~4mm) の混入多し、黒雲母片を含む	(2)	暗褐色 (10YR 5/6)	砂質土	粘性大、砂粒、黒雲母片を若干含む
IIc	褐色 (10YR 1/2)	砂質土	砂粒の混入多し、黒雲母片を含む	(3)	黒褐色 (10YR 5/6)	砂質土	砂粒、黒雲母片を少量含む
Id	褐色 (10YR 1/2)	砂質土	砂粒の混入多し、黒雲母片を含む	(4)	黒褐色 (10YR 5/6)	砂質土	砂粒、黒雲母片を少量含む

第18図 第2次調査遺構全体図

第5章 検出された遺構

—第2次調査—（第18図、第16～17図版）

1 S T 1 (第3号住居跡) (第19図)

調査区南部の98-41G西側にその一部を検出された竪穴住居跡である。検出された部分は、竪穴住居の北東側の壁の一部である。壁は98-41G西側壁を越えて未掘部分へ続く。また、98-41G南側壁を越えて未掘部分へ続く。さらに98-41Gの南側に事前調査のテストピットTP2があり、これによって切られている。そのため、検出は容易でなかった。

遺構確認面はII b層である。壁の立ち上がりや壁柱穴など明確な手がかりがあって検出できたが、II b層を掘り込んで地山（第III層）の直前で床面を形成しているので、検出は容易でなかった。

全体を検出していないので、平面形や規模構造については不明である。しかし、検出された壁が直線的で、その一部が曲がることから隅丸方形の平面プランを推定することができる。

柱穴は、主柱穴や支柱穴があるかどうかは不明であるが、壁柱穴が検出されている。直径8～10cmで、深さ5～10cmである。

覆土は4層ある。次の通りである。

1層 黒色砂質土(10YR%)で、粘性が大である。小さな黒雲母片を含む。

2層 黒褐色砂質土(10YR%)で、細かい粒子による土で、砂粒を少々含む。また、黒雲母片を少量含む。

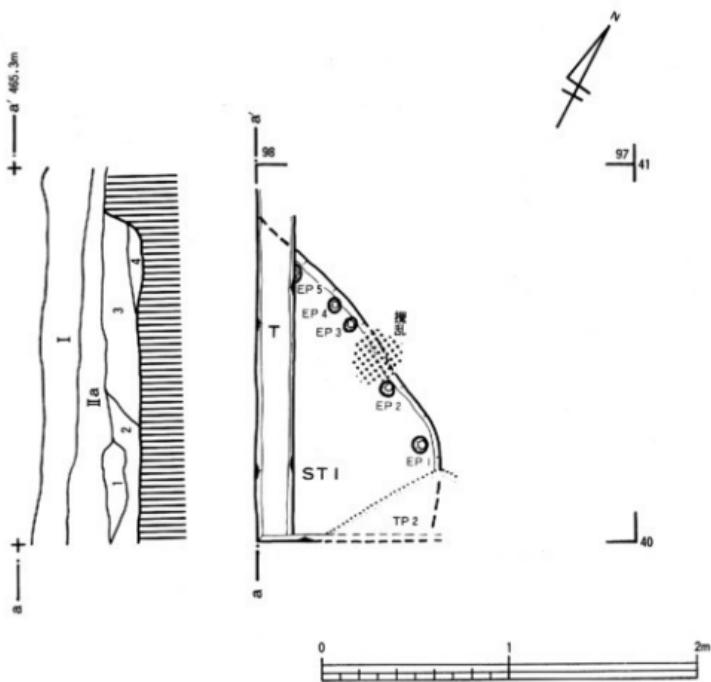
3層 黒色砂質土(10YR%)で、1層とほとんど同じである。粘性が大であり、少量の砂粒と黒雲母片を含んでいる。

4層 黒褐色砂質土(10YR%)で、φ2～4mm程度の砂粒を若干含む。また、黒雲母片を少量含む。

以上の4層の堆積状況は部分的であるため、覆土の堆積による住居廃絶について類推できない。

出土遺物は、覆土からは第II群土器の破片少數とフレークやチップがわずかに検出できた。床面上からは、第II群土器の破片が3片のみである（第24図5、第25図13、第27図36）。したがって、本住居跡の営まれた年代は、第II群土器の時期に求めることができる。なお、第II群土器は本住居跡の覆土の上部を覆う第IIa層からも出土しており、第II群土器のある時期に住居跡が営まれていることになる。

本住居跡は、第1次調査から合算して本遺跡で第三番目に検出されたことになる。



ST 1 覆土

層No	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR 2/1)	砂質土	粘性大、黒雲母片を含む
2	黒褐色 (10YR 3/1)	砂質土	砂粒・黒雲母片を少量含む
3	黒色 (10YR 2/1)	砂質土	粘性大、黒雲母片を含む
4	黒褐色 (10YR 3/1)	砂質土	φ2~4mmの砂粒を若干含む。黒雲母片を含む。

第19図 第2次調査 S T 1

2 S T 2 (第4号住居跡) (第20図)

調査区の西部、99~100-43~44Gの4グリッドにわたって検出された竪穴住居跡である。住居跡の北東部分にあたり、未掘区に住居跡の西側および南側の部分が広がっていく。

事前調査の試掘区TP3が100-43Gの中央にあり、TP3の中央に石組遺構(SM1)を発見したため、慎重に掘り下げた結果、検出できたものである。

遺構確認面はIIb層であり、IIb層上面で確認した。IIb層もその上部のIIa層も、そして住居跡覆土も黒色または黒褐色を呈するため、遺構確認は容易でなかった。部分的には掘り過ぎたところもある。

全体を完掘していないので、平面形や規模構造については不明である。しかし、検出した部分が壁周全体の1/3程度、面積全体の1/2程度があるので、相当わかる。平面形は、不整な点もあるが、二辺が直線的であり、隅丸長方形を呈するとみられる。長軸方向はE-Wの方向である。床面は、IIc層まで掘り込んで形成され、ほぼ平坦である。したがって、IIb層とIIc層を壁としており、検出できた北壁の壁高は約10cm、東壁の壁高は約7cmである。やや緩やかな立ち上がりを示す。壁に沿って支柱穴E P 6~23の18個がめぐる。径8~10cm、深さ6~11cmである。他に主柱穴や支柱穴は見あたらない。

住居跡中央よりやや北へ寄ったところに石組遺構(SM1)がある。2個の磨石を含む20数個の石(花崗閃緑岩)を平面的に組んでいる。石を入れる程度の穴を掘り、丁寧にその下半を埋めている。平面形は長方形を呈し、70cm×48cmで、長軸方向はNW-S Eである。用いられた石は、火熱に強い花崗閃緑岩であるため、変色変質を容易に判別しかねる。1個だけは熱を受けて崩れかかっている。また、この遺構内部の土は、住居跡の床面と同じものである。これまた、変色・変質は明瞭でないが、やや赤味を帯び、薄いブロック状に割れる傾向があり、火熱を受けているものとみられる。したがって、この石組遺構は住居跡の屋内炉である可能性を有する。しかし、石組炉とするには問題もある。

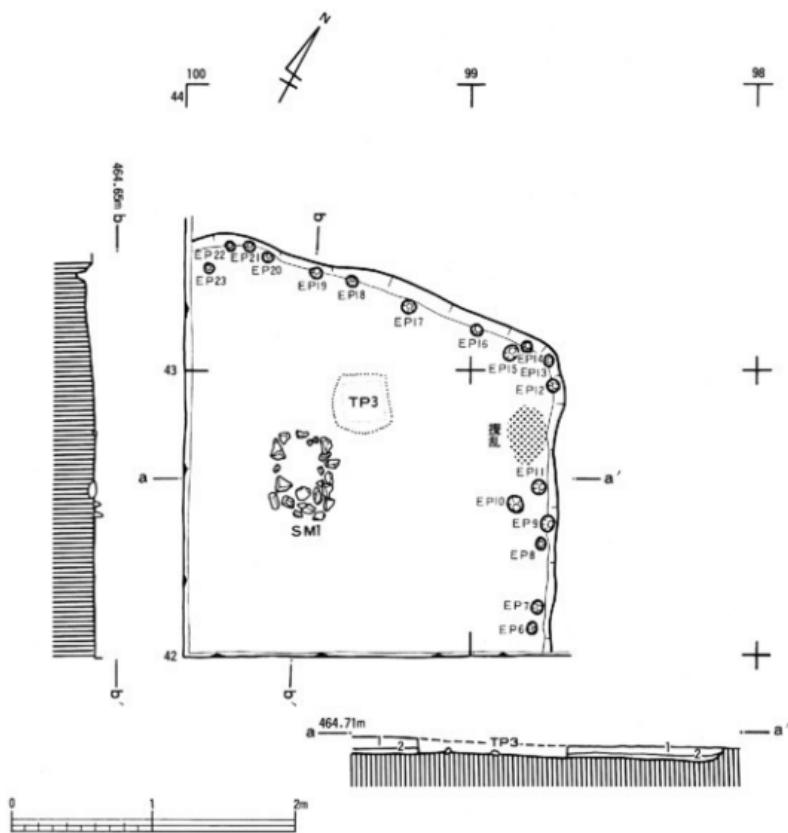
一つは、焼けた痕跡が炉にしては弱いのではないかということである。さらに床面レベルから見れば、石組遺構が炉にしてはわずかに高くはないかということである。これらの問題点については第7章の1でとりあげることにする。

住居跡も石組み遺構も同一の覆土を有する。

1層 黒色砂質土(10YR 5/6)で、粘性があり、黒雲母片を少量含んでいる。

2層 黑褐色砂質土(10Y R 5/6)で、少量の砂粒・黒雲母片・炭化粒子を含んでいる。

二層とも全般的に水平的な堆積で、未掘部分(斜面の上方側)の南西方向より流れ込むように堆積している。覆土に層位的な乱れはなく、石組遺構も住居跡全体とともに埋まっている。



ST2 土層

層No.	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR 2/1)	砂質土	粘性あり。黒雲母片を少量含む。
2	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質土	少量の砂粒・里雲母片・炭化粒子を含む。

第20図 第2次調査 S T 2

出土遺物は、覆土より比較的多量の第Ⅲ群土器と比較的少量の第Ⅳ群土器の破片、および石鐵 1 点（第22図版と第31図の 5）鎌状石器 2 点（第22図版と第31図の 9・14）凹石 1 点（第23図版と第32図の26）、チップやフレーク少々である。覆土 1 層には第Ⅱ群土器の破片も混じっている。床面直上のものは第Ⅲ群土器の破片（第17図版 3、第28図 39, 41, 43, 50, 53, 57他）のみで、石組造構では同じく第Ⅲ群土器の破片が 1 点検出されている。

住居跡の年代は、床面直上の土器である第Ⅲ群土器の時期に求めることができる。石組造構も同じである。石組造構は住居跡の屋内施設として認められ、第Ⅲ群土器の時期に営まれたものであるといえる。

本住居跡は、第 1 次調査より合算して 4 番目の住居跡にあたる。

3 SX 1 (第21図)

調査区の東部、98—42~43Gにおいて検出された。表土の第 I 層を剥いでまもなく、II a 層上面においてその輪郭が確認されたものであり、その性格は不明であった。

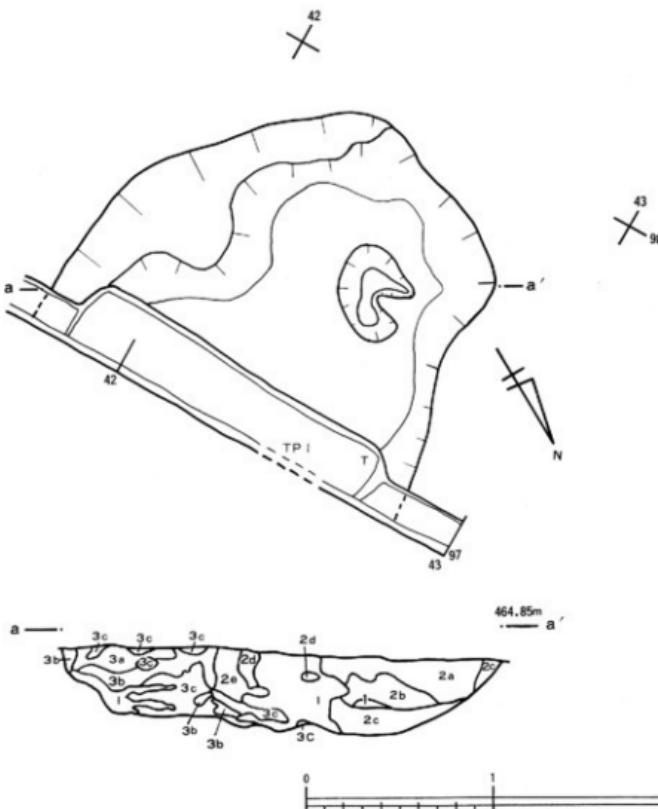
平面形は、東西にやや長い径 2 m の不整な楕円形である。東側に未発掘の約 1/3 が残っている。底面の形状は凸凹のある不整な摺鉢状を呈し、中心部（最深部）は約 50cm の深さで、北西の端にずれて位置する。平面形も底面も、埋土と地山との境界面が不明確である。

SX 1 の穴が形成された落ち込み面は II a 層であり、底面は III 層中まで達している。埋土は 9 つの層に分けられる。第21図の通りである。

I 層から 3 c 層までの 9 つの層が複雑に入り組んでおり、自然堆積によって形成されたものではない。埋土は大きく見て北西部側は黒色土、南東側は黄色土で構成されている。埋土のうち 1 層は I 層、2 層群は II 層、3 層群は III 層にそれぞれ対比されるものである。底面に沿って I 層を起源とする黒色土（埋土 1 層）が広がっており、上下が逆転した様子がうかがえる。したがって、この形成された時期は II 層堆積以後であり、遺跡形成後になる。

出土遺物は、小さな土器の破片（第 II 群土器）と石器 1 点（第32図、21）とチップが数点であった。いずれも浅いところからの出土で、深いところからの出土はなかった。

この SX 1 の性格については、第 7 章の 1 で述べることとする。



埋土一覧表

層 N	土 色	備 考
1 層	10YR 1/2 (黒 色)	粘性大、微量の金雲母を含む。
2a 層	5 YR 3/2 (黒褐色)	粘性大、全雲母を若干含む。砂粒は少ない。
2b 層	10YR 3/2 (")	" " "
2c 層	10YR 3/3 (")	金雲母は少ない。砂粒はほとんど少ない。直径2~4mmのものを含む。
2d 層	10YR 2/1 (黒 色)	微量の金雲母含む。
2e 層	10YR 3/2 (黒褐色)	粒子は細いが砂(2mm~4mm)を含む。
3a 層	10YR 3/4 (暗褐色)	直径2mm程の砂粒を若干含む。
3b 層	10YR 3/4 (褐 色)	" かなり含む。
3c 層	10YR 6/6 (明黄褐色)	粘性大、金雲母片、微小の砂量を含む、粒子の大きさ一定。

第21図 第2次調査 S X 1

第6章 第2次調査出土遺物

1 出土遺物の分布について

① 出土概況

今次調査出土遺物1,349点の内訳は、土器715点、石器27点、剝片445点、礫等162点であった。全体的の出土傾向としては、S T 2内と周辺およびS T 1東側に多く、逆にS X 1内外はごく少ない。なお、試掘時に遺物包含層を掘り下げたため、分布図中の試掘地内出土数は少くなっている。

以下、土器と石器に分けて、水平分布と垂直分布についての傾向性を記すこととする。

② 土器（第22図）

土器のうち約半数の344点について、第I群～第IV群と分類された（本章の2）。

ア 水平分布

第I群土器 出土数は5点と少ないが、D、F、Gのグリッドにおいて、ややまとまり気味に存在する。

第II群上器 調査区全域から出土しているが、GとHグリッドに多い。とくにGグリッド南東部付近に集中している。

第III群上器 A～Eグリッドに多くみられるが、とくに、S T 2内、Bグリッド北西部一帯に集中している。

第IV群上器 A～C、およびEのグリッドに多く存在している。

イ 垂直分布 調査区付近の地形は、南から北に傾斜していることと、調査区がL字形であることなどから、X軸、Y軸各方向に遺物出土地点の断面図を作成することとし、その作図範囲（水平幅）は、50cmとした。

各土器群の出土傾向

第I群土器 比較的低位に存在する。

第II群土器 低位から上位まで散存している。

第III群土器 低位に多く存在する。

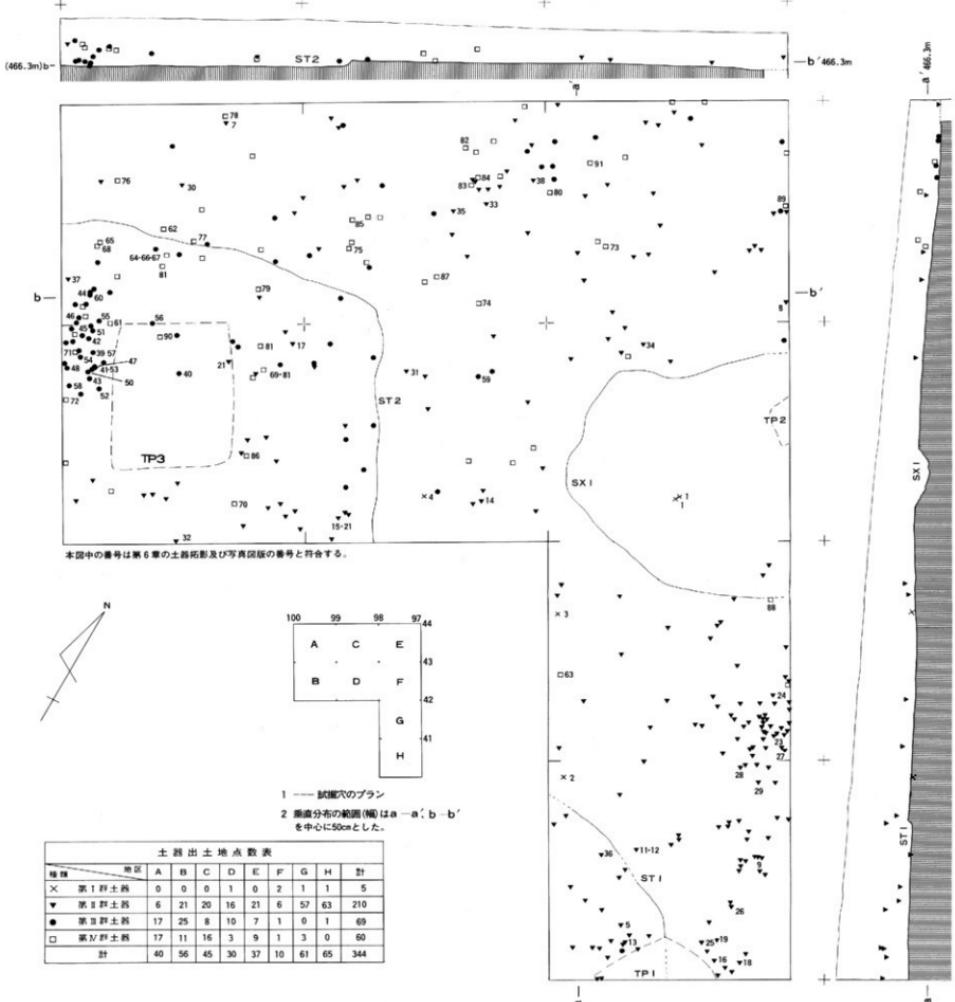
第IV群土器 中位以下に存在するが、傾向としては第III群より上にある。

全体的には、各群が局的に分かれる傾向は明確ではない。

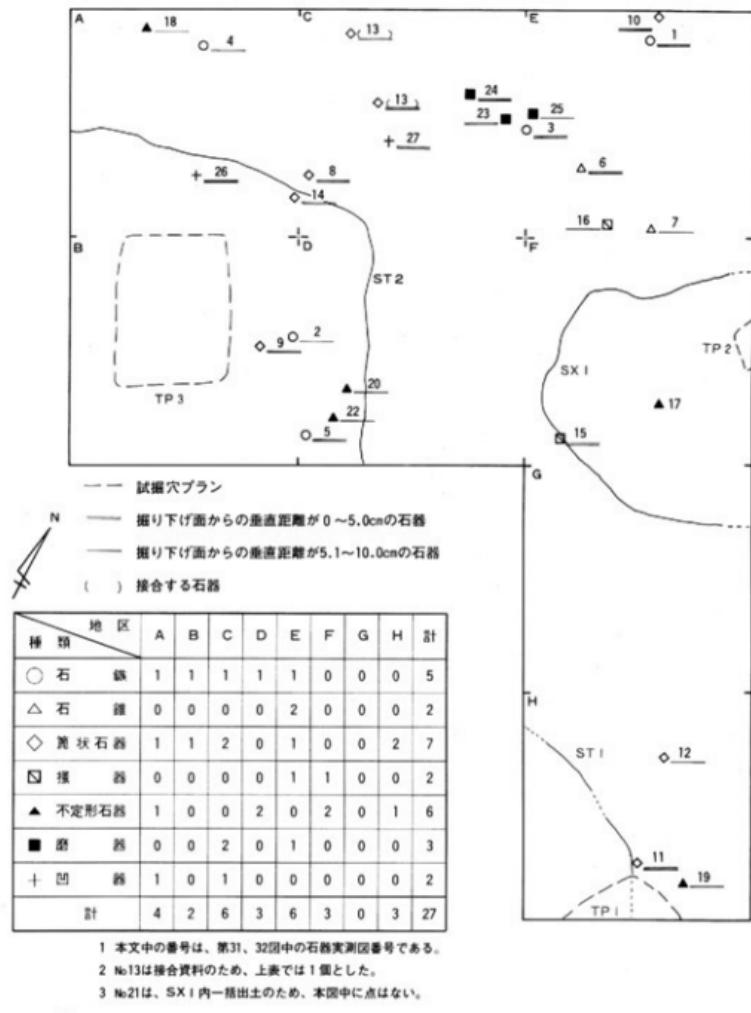
③ 石器の分布（図23）

石器は27点出土している（本章の3）。水平分布としては、A、C、Eグリッドに比較的多く存在し、反面、Gグリッドからは出土していない。

土器の垂直分布図と対比し、とくに掘り下げ面からのレベル差でみると、石器の多くが、比較的低位から出土している傾向がうかがえる。



第22図 第2次調査出土土器分布図



第23図 第2次調査出土石器分布図

2 大野平遺跡の土器群

今回の発掘調査では合計 715 点の土器が出土した。しかしながら、小破片あるいは細粒化している土器も多く、図示出来る土器片は91点と全体の 12.7 % にすぎない。

出土した土器の約半数については第Ⅰ群～第Ⅳ群に大きく分類した。各群は文様構成、胎土の状態、施文具の相違により更に細分化することが出来た。（第24図～第30図、第18図版～第21図版）

第Ⅰ群土器（第24図1～4、第18図版1～4）

これらの上器は主に発掘区の中央部、98-41・42・43、99-43各グリッドから検出されたが、分布は疎である。いずれも沈線文や刺突文を持つことが特徴的であり、胎土には砂粒を含み器壁は薄く、纖維の混入はない。

1～3は、先の平坦な工具により斜めの沈線を施している。横位の区画が見られ、下部には逆方向の沈線を施しているため、何段か横の区画を持ち、その間に交互に斜めの沈線が施されている土器を推定できる。4は口唇が小波状を呈し交互の刺突により文様が構成されている。

第Ⅱ群土器（第24図5～第27図38、第18図版5～19、第19図版20～33、第20図版34～38）

これらの上器は発掘区の全体に渡って検出された。やや低い隆起線と大きな円形刺突や連続した刺突、条痕文によって文様を構成している土器群である。胎土には砂を多く含み器壁は厚手であり、多量の纖維を混入している。この群は、文様の構成と条痕の状態や器壁の観察により更に3類に分けられる。

第1類（第24図5～第25図14、第18図版5～14）

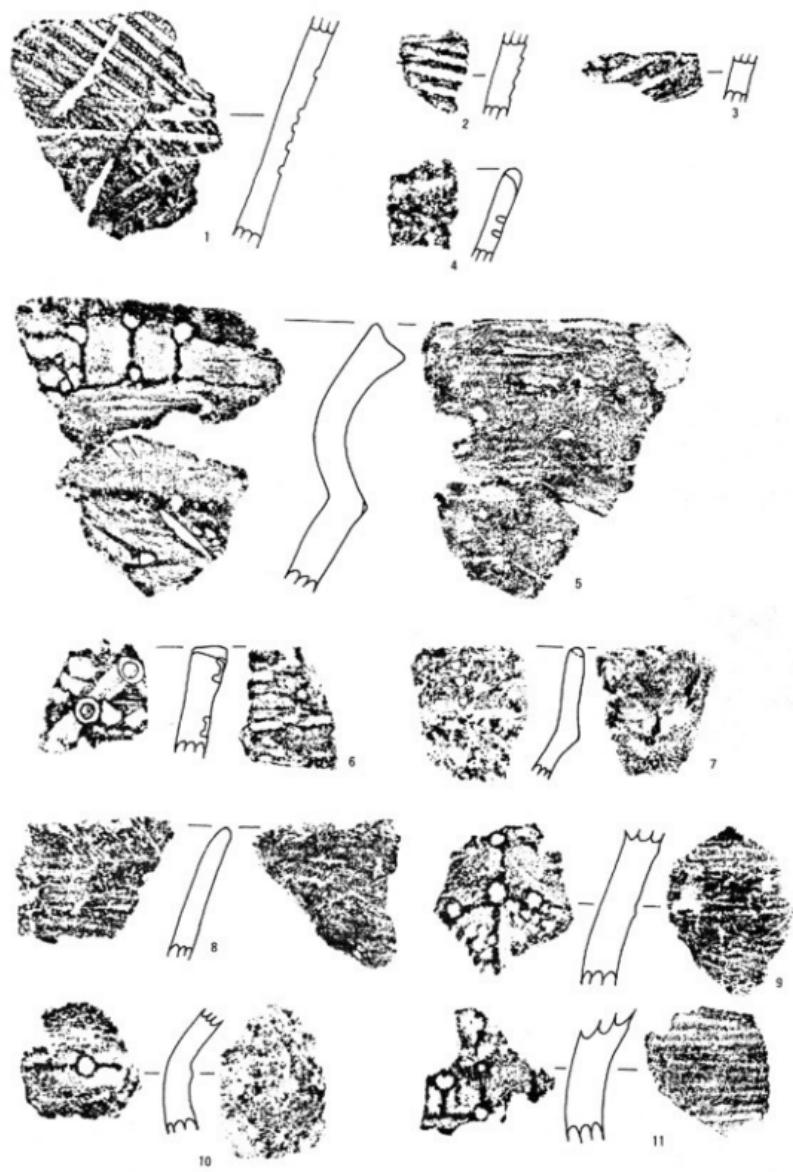
条痕文を表裏に持ち、竹管や低降起線により文様を構成するものであり、頸部で屈曲し平底になる土器を推定できる。

第2類（第25図15～22、第18図版15～19、第19図版20～22）

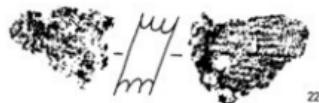
表裏に細い条痕を持つものである。1類と比較すると条痕が密であり、しかも柔かい感じを受けれる。文様を持つものではなく、口縁部破片もないため器厚・胎土から見て、おそらくは第1類土器の体部破片かと思われる。

第3類（第26図23～第27図38、第19図版23～33、第20図版34～38）

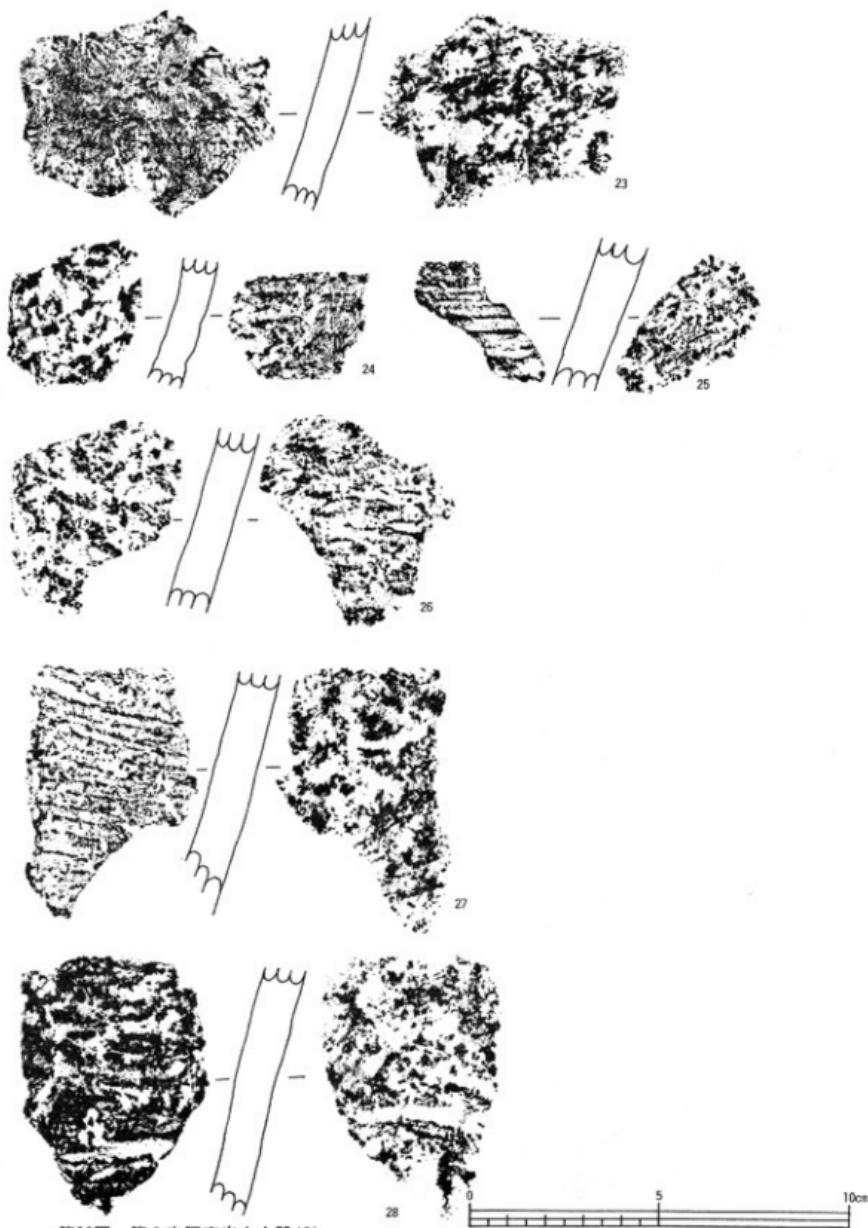
表裏に太い条痕文を施すものである。器壁が厚いものと、薄いものが観察されたため、a・bと



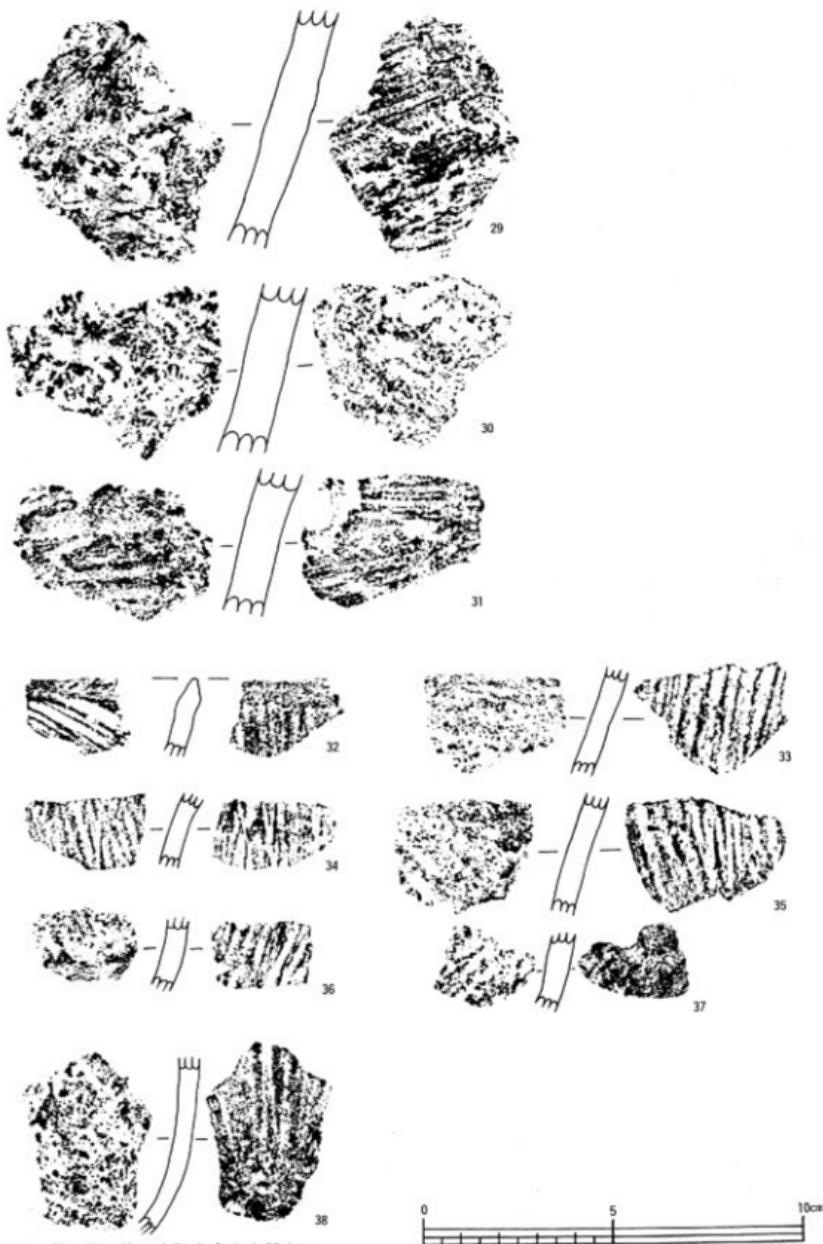
第24図 第2次調査出土土器(1)



第25図 第2次調査出土土器(2)



第26図 第2次調査出土土器(3)



第27図 第2次調査出土土器(4)

して更に第3類を2つに細分した。

a (第26図23～第27図31、第19図版23～31)

器壁が厚く、胎土には纖維や小石大の砂を含む土器であり、風化も著しい。第2類と比較すると条痕の巾が広く深い。第1類土器の体部破片かと思われる。

b (第27図32～38、第19図版32～33、第20図版34～38)

器壁が薄く胎土の纖維含有も少なく、細かい砂を含んでいる。主に発掘区の北側に多く分布している。32は口縁部破片であり、33～36は体部、38は底部付近と思われる。口縁が丸みを帯びて尖り、やや丸底ぎみの底部を持つ割合小さめの土器が推定される。表面の条痕は斜めに施されるものもあるが、内部の条痕はいずれも縦方向であり、第II群の中でも異った印象を受ける。

第III群土器 (第28図39～60、第20図版39～60)

これらの土器は主に発掘区の西側100—43・44グリッドから多く検出された。いずれも胎土に纖維を含み、表面に条痕文を施しその上にまばらなRLの縄文を浅く施している。裏面は無文でありますなめらかである。

分布が遺跡内で集中するという傾向や胎土の観察によると個体数は少ないと考えられる。おそらく体部には条痕文を施して整えたあと、縄文を施したものと思われる。縄文の施文は底部には及ばず、底部付近は条痕文のみとなる尖底の土器と考えられる。

第IV群土器 (第29図61～第30図91、第20図版61～62、第21図版63～91)

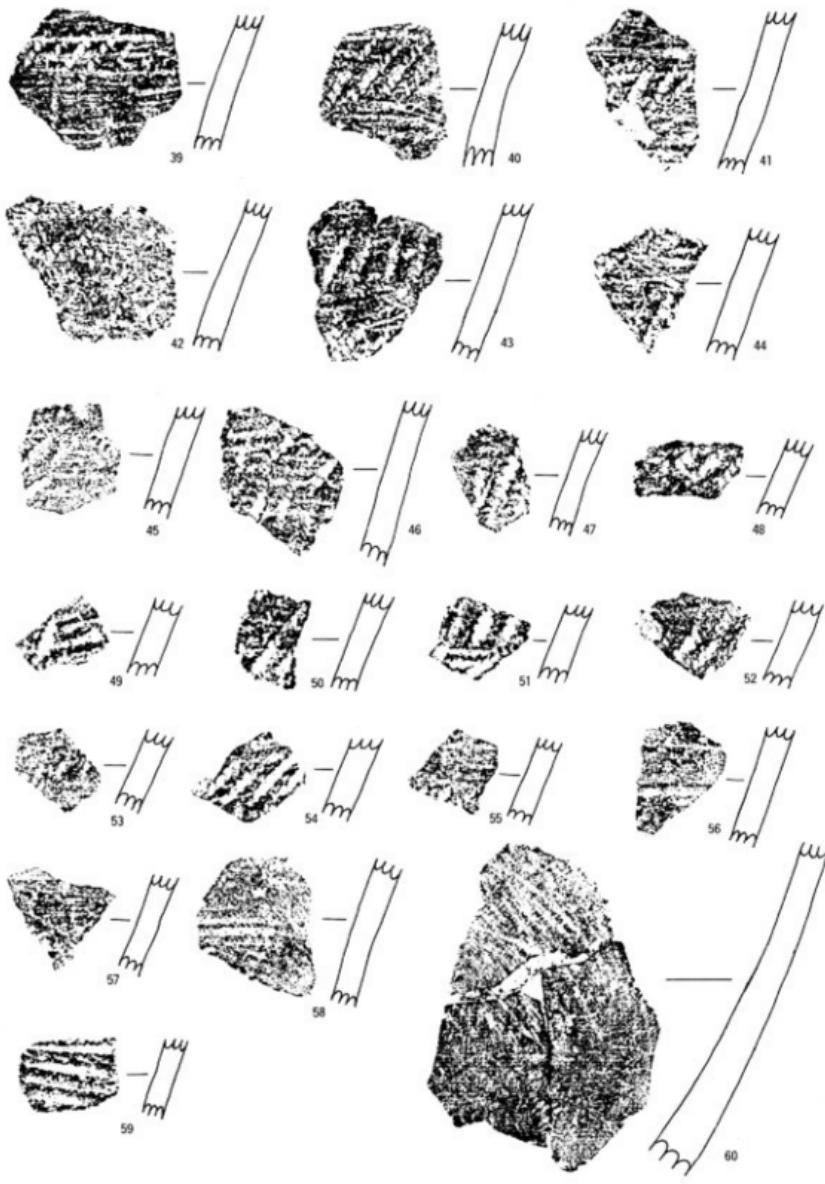
これらの土器は主に発掘区の西・北側100—43・44、99—44グリッドから多く検出された。胎土に纖維を含み羽状縄文を施文する土器と考えられる。文様の構成や施文工具の差違により更に1～4の4類に細分できた。

第1類 (第29図61～69、第20図版61・62、第21図版63～69)

撚糸圧痕や竹管によって文様が構成される土器である。わらび状の撚糸圧痕と竹管による沈線で文様を成すもの(61・66・67)、粘土紐を貼りつけて文様を成すもの(61)もある。口縁部から頸部にかけての破片が多いと考えられる。

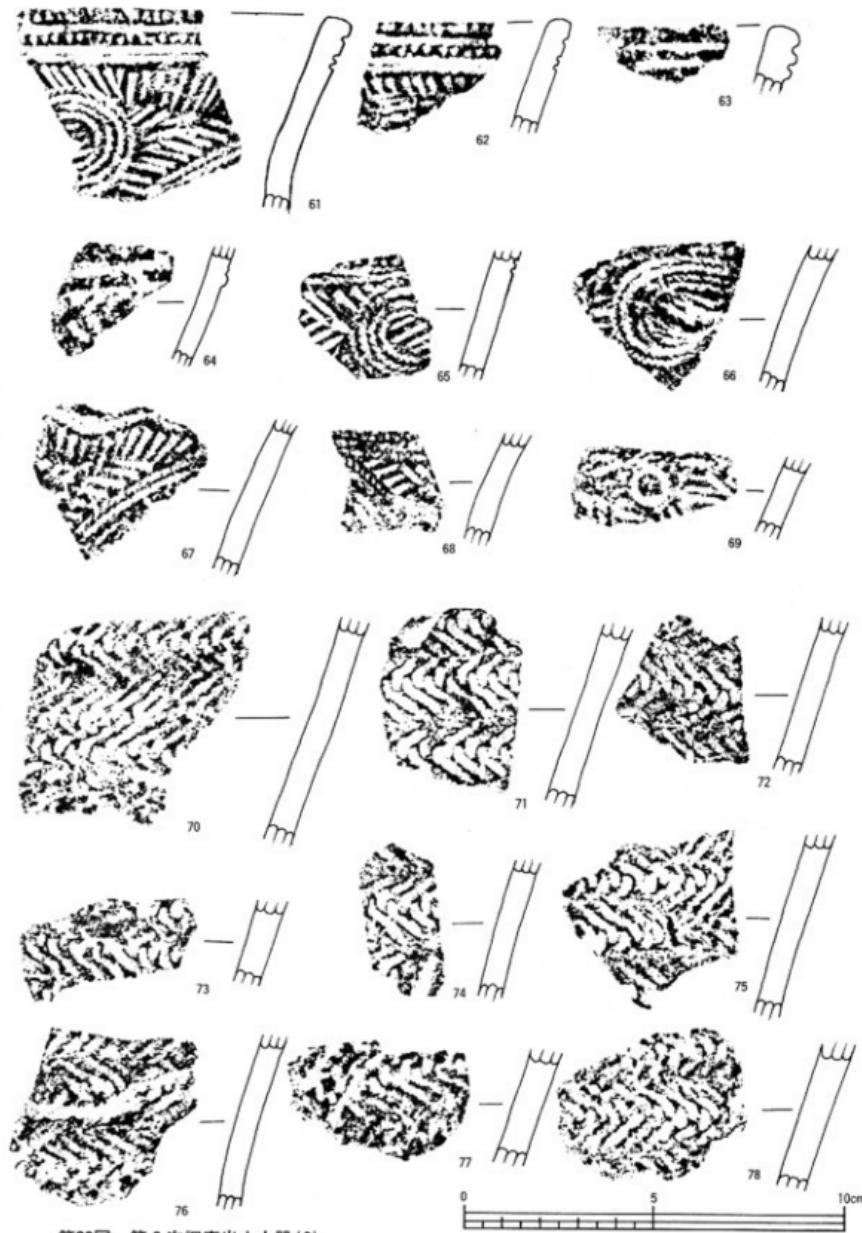
第2類 (29図70～第30図81、第21図版70～81)

結束のある羽状縄文を持つものである。RL、LRの原体を結束させて羽状縄文を構成している。

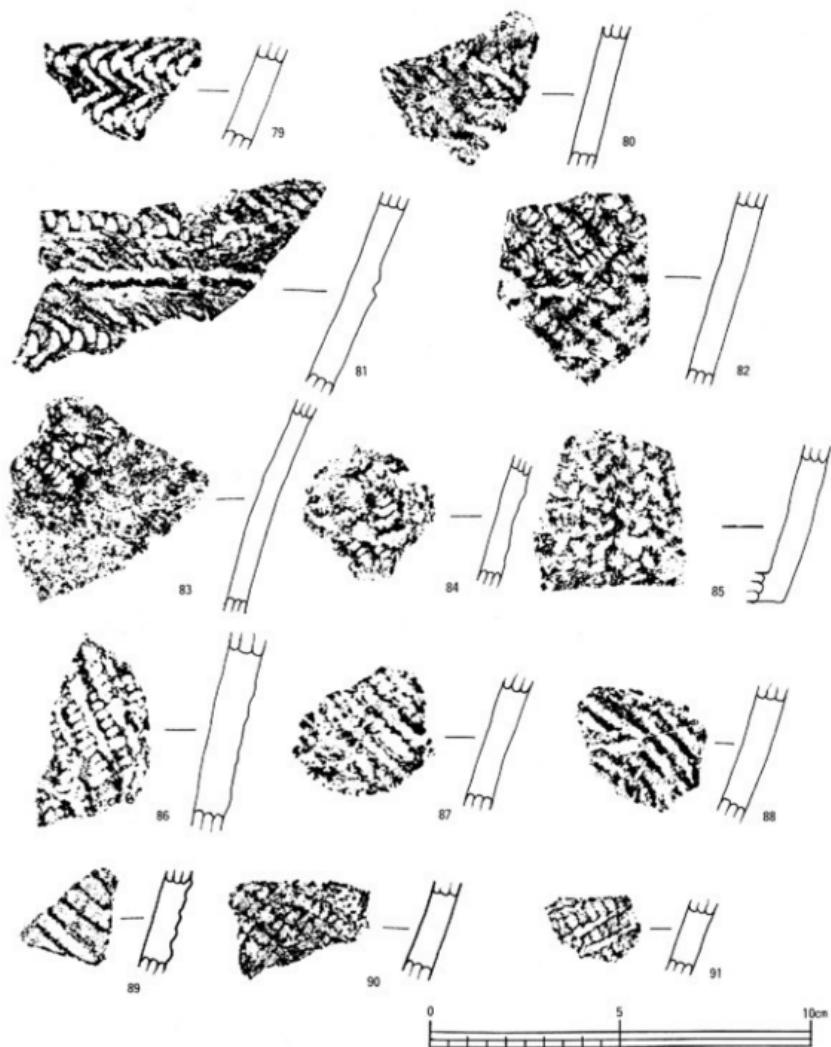


第28図 第2次調査出土土器(5)





第29図 第2次調査出土土器(6)



第30図 第2次調査出土土器(7)

原体の巾は約2cmほどであり、特に長大なものや短小なものはない。81は3点が約180cmほどの距離をおいて接合している。爪形文で羽状縄文の間を区画している。いずれの土器も、おそらくは第1類土器の体部破片と考えられる。

第3類（第30図82～85、第21図版82～85）

短い施文原体で羽状縄文を施すものである。原体の長さは約1cm程であり、幾段にも渡って回転させている。85は底部破片である。これらの土器もおそらく第1類の体部破片と思われる。

第4類（第30図86～91、第21図版86～91）

L RやR Lの原体を用いて施文されている縄文のみの土器である。86・91は附加条であり、原体の変化を見せているものである。

3 大野平遺跡出土の石器

今回の調査では、合計27点の石器の他、剝片と、多量の花崗岩片が出土している。花崗岩片は、遺跡の立地点の基盤岩に由来しているものと考えられ、遺物とは認めがたい。剝片で2～3cmの小形のものは131点程出土している。多くのものに折れ面があり欠損している。石材は、珪質頁岩が主体を占める。

以下本項に於ては、27点の石器を中心に記載することにしたい。

石鏃（第31図1～5、第22図版1～5）

5点出土している。いずれも、先端と基部が欠損している。剥離面を残さないもの、正面と背面に自然面と主要剥離面を残しているものがある。1は石錐、2は石槍の可能性もあるが、欠損のため石鏃として分類した。4・5は打面、バルブの部分を調整した剝片で石鏃の未製品と考えられる。

石錐（第31図6・7、第22図版6・7）

2点出土している。いずれも剝片を利用して、素材の形を大きく変えるような調整剥離は認められない。6は縦長剝片、7は横長剝片を利用して、打面部を折っている。使用痕は7の先端部に認められ摩耗と同心円状の擦痕が観察された。

籠状石器（第31図8～14、第22図版8～14）

7点出土している。平面形態は基部先端が狭まる撥形をし、刃部は弧状の刃刃が多い。断面形は凸レンズ形であるが、正面側の方が厚い物が多い。また刃部は全て片刃を呈す。調整剥離は、打点やバルブの状況より一般に背面が古く、正面の剥離面が新しいものが多い。13の接合資料以外全て

完形品である。大きさの平均値は長さ 75.1 mm、幅 35.4 mm である。使用痕は、基部と刃部に渡って観察される。基部の使用痕は柄づれと考えられる。刃部の摩耗部には、縦方向の擦痕が無数に観察される。

搔器 (第31図15、16、第22図版15、16)

2点出土している。刃部の剥離角度が高いという特徴よりなる石器群である。15は、正面周縁部より連続的に調整剥離を加えているもので、剥離面の切合から、刃部再生によって使いこまれていることが窺える。16は基部が欠損し、刃部には加火熱によるハジケ面が観察される。

不定形石器 (第31図17、18、第32図19～22、第22図版17、18、第23図版19～22)

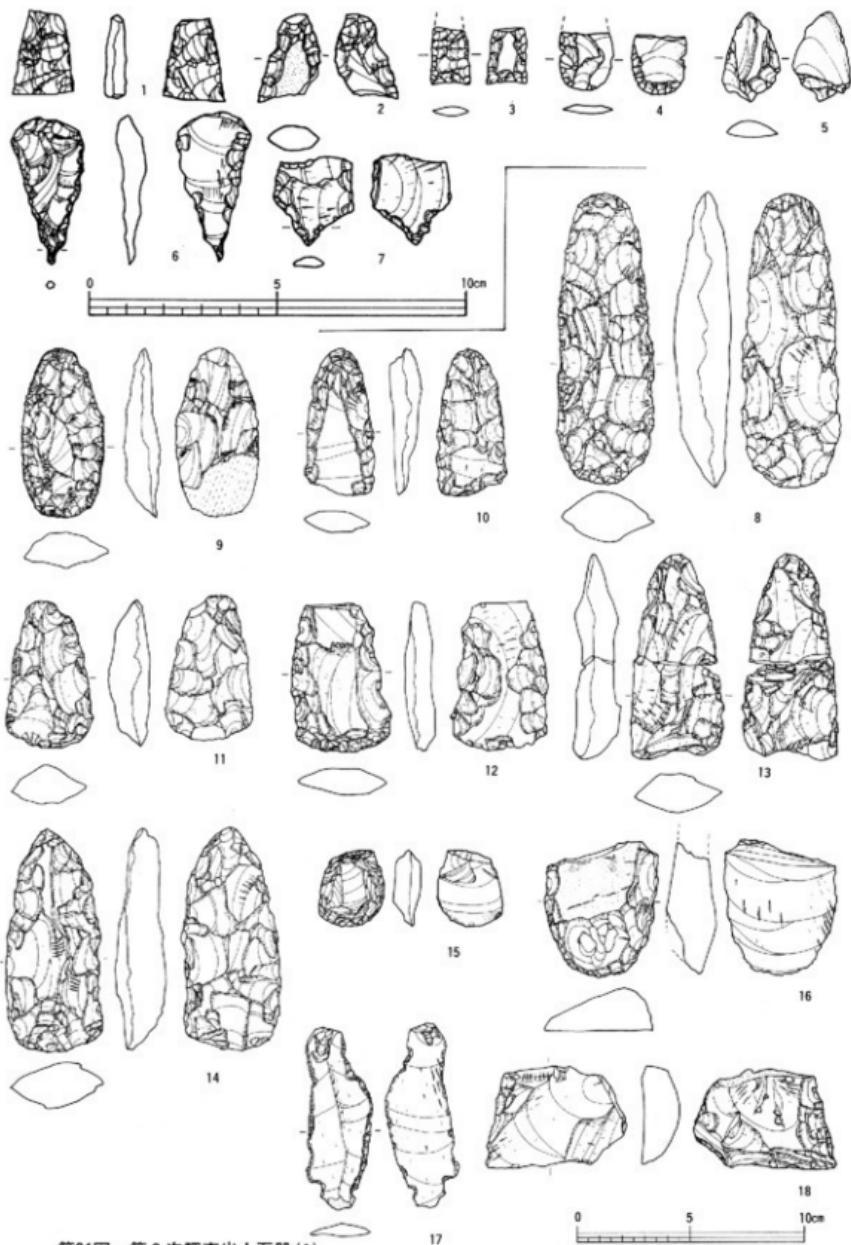
6点出土している。19・20・21は打面・バルブの部分に調整剥離を加え、剥片を加工しているという特徴がある。いずれも一部欠損しているので、全体形は不明であるが、19・20のように打面・バルブ以外調整剥離が施されないものと、21のように比較的全体に渡るものがある。18は、正面の高まりが低いため、背面の二側縁に鈍角に近い調整剥離が施されている。17は、縦長剥片の側縁に連続的なこましい剥離が施されているもので、ノッチの入り方が顕著でないため、不定形石器の中に入れた。22は、欠損している剥片の一部に調整剥離が施されているものである。

磨石 (第32図23～25、第23図版23～25)

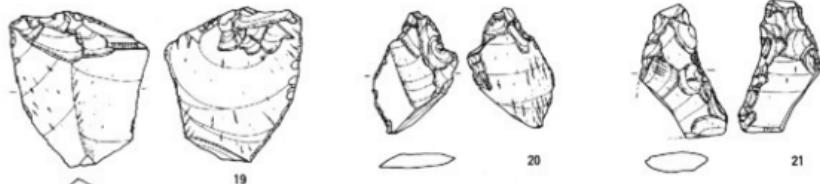
3点出土している。いずれも縦長の礫を素材とし、幅の狭い部分の稜を主な作業面として使用している。23・25は作業面と自然面との境に細かな剥離が観察される。磨ると打つという両作業が窺える。いずれも欠損している。24は加熱によるハジケで玉葱状に剥離している。23・25は打撃による欠損と考えられる。

凹石 (第32図26、27、第23図版26、27)

2点出土している。いずれも縦長の礫を使用しており、その表裏面に敲打による凹部を形成している。凹部は、深さ 1～2 cm 前後と浅い。いずれも欠損している。



第31図 第2次調査出土石器(1)



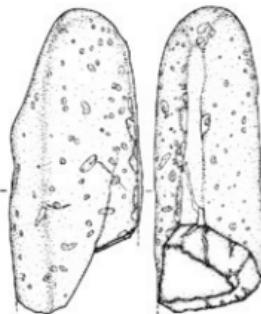
19

20

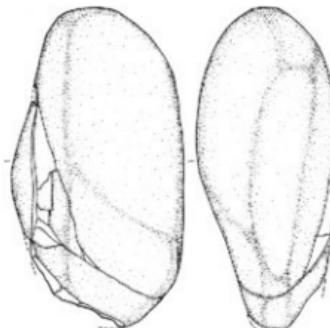
21



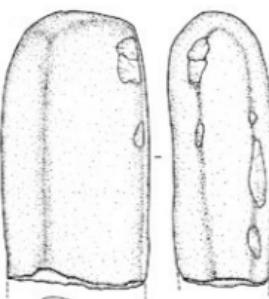
22



23



24



25



26



27



第32図 第2次調査出土石器(2)

第7章 考察

1 大野平遺跡の遺構について

本遺跡の地形は、緩く傾斜しており、南側が高く、北側に行くほど低くなり、丘陵と接する。また西北に行くほど低くなり山と接する。さらに、東北に行くほど低くなり、谷間の段丘へと続いていく。このような地形上にある遺跡の部分を、南地区、中央地区、西北地区、東北地区と大別すれば、遺跡内部の時期別居住区分を示すことができる。

最も高い位置にある南地区は、第2次調査および本木氏の遺物収集によって、縄文時代早期中葉（田戸下層式・田戸上層式・子母口式並行期）～同早期後葉（野島式・鶴ヶ島台式・素山IIb・素山IIa式並行期）～同早期末葉（上川名I式・梨木畠式・船入島下層式並行期）～同前期初頭（上川名II式並行期）の遺物が収集され、竪穴住居跡2棟が検出されている。

次に高い位置にある中央地区は、第1次調査の第1地点と第2地点を含み、縄文時代早期中葉～同早期後葉の遺物が収集され、竪穴住居跡1棟を検出している。

中央地区よりやや低くなる西北地区は、第1次調査の第3地点を含み、第1次調査と本木氏の資料収集によって、縄文時代前期末葉（大木6式期）～同中期初頭（大木7式期）～同中期中葉（大木8式期）～同中期末葉（大木10式期）の遺物が収集され、竪穴住居跡1棟が検出されている。

北地区は、中央地区より低く、湧泉のある地区である。本木氏の資料収集・事前調査によって、縄文時代前期末葉～同中期初頭～同中期中葉の遺物が収集されている。

東北地区も中央地区より低く、本木氏の資料収集や事前調査によって、縄文時代前期末～同中期の遺物が収集されている。

以上のことから、次のように理解できる。

本遺跡に人が居住するようになったのは縄文時代になってからである。縄文時代の人々は、大別して縄文時代早期中葉～前期初頭と縄文時代前期末葉～中葉の2時期にわたって断続的に居住したのである。最初の方の時期には、南地区と中央地区を居住区域として、後半の時期にはその周辺の西北～北～東北の各地区にわたる範囲を居住区域として用いたのである。前期以降、馬蹄形集落が発達するので、そうしたことも考えられる。もっとも、北地区や東北地区は発掘していない。

なお、本木氏の収集品の中にアメリカ型石籬があるので、どこかに弥生時代の住居が存在する可能性がある。

本遺跡の、このような時間的・空間的な集落居住のあり方は、遺構を明らかにして初めていえることである。しかし、これまでに発掘された遺構は少ない。竪穴住居4棟と性格不明遺構1基のみである。それにしても、問題点が多い。

第1の問題点は、竪穴住居を完掘したが、壁が不明確で、平面形がはっきりしないことである。該当するのは、第1次調査による第1号住居跡と第2号住居跡である。

第1号住居跡について加藤 稔氏は「住居跡の床面は、現地表から40cmほどしかなく、浅いため竪穴としての掘り込みは十分に認められず、輪郭は不明である。むしろ平地住居に近いのではないかとさえ思われる。直径3mで周囲に14個の柱穴がみられた。柱穴の配列から推して径4m前後の隅丸方形（半円半方？）プランであったと考えている。」と述べている（註1）。

現地表から浅く掘り込んでいる点は、第2次調査によって検出されたST1やST2も同じであり、置賜地方の他の遺跡でも同様である。ST1やST2の検出状況からみて、地山の直前土層である黒色土層の下部から掘り込んでいること、そして置賜地方の绳文早期の住居跡が一般に地山層を深く掘り込んでいないことにもよるのではないかとみられる。ST1とST2の場合は、掘り込まれた住居の壁が浅いこともあって苦労の末検出したが、竪穴住居跡である。置賜地方で発見されている20数例の住居跡もすべて竪穴住居である。したがって、第1号住居跡は竪穴住居であることに間違いないとみられる。

それでは、平面形はどのようなものであろうか。平面形を知る手がかりは柱穴の構造にある。柱穴の構造が上屋の構造と密接に関連し、それが平面形とも密接に関連することは既に明らかにされている。第1号住居跡は、主柱穴十支柱穴の構造であり、その配列は方形プランの配列である。したがって、柱穴の配列により隅丸方形と平面プランを推定した加藤氏の説は正しい。置賜地方の绳文時代早期の竪穴住居の中に、主柱穴十支柱穴の構造のものも、隅丸方形の平面プランのものも存在する（註2）。

そうなれば、柱と柱の距離から平面形の概略の寸法は割り出せることになる。したがって、加藤氏のいう4m×4m位の隅丸方形の竪穴住居跡という第1号住居跡が推定されることになる。

同様にみていくば、第2号住居跡は3.4m×3.9m位の長方形プランの竪穴住居と推定できる。

次の問題点は、第2次調査によるST1とST2が完掘されていないことにある。ST1とST2はいずれも斜面に掘り込まれた住居跡であり、発掘されて検出された部分が斜面の下方側である。しかも、確認面が地山の直前層である第Ⅱ層下部（黒色土層の仲間）で、地山の第Ⅲ層を深く掘り込んでいない。そのため検出は難しかった。

しかし、掘り込み方も壁柱穴のあり方もはっきりしているし、床面もきちんとできていた。ST1内部の遺物出土状況も次の通りである。床面直上に第Ⅱ群土器、覆土上に第Ⅱ群土器、覆土の上層に第Ⅲ群土器が出土している。床面直上の土器と覆土上層の土器に接合関係もないし、同一個体の破片であるという関係もない。遺物の水平垂直分布からみて、ST1直上の覆土上層の土器とST1外の上層の土器には類似関係もあるし、斜面にそって自然に分布している。第Ⅱ群土器は、第2次調査区全体に出土しているが、分布のあり方からしても2～3の型式に細分できる可能性を有

する。ただ破片が小さすぎて有効な特徴をとらえることは難しい。それにしても、S T 1 の時期のものと S T 1 廃絶後のものと区分できる可能性を有する。そのような S T 1 の検出状況であるが、竪穴住居の一辺が部分的に検出されたにすぎない。ほぼ直線的な壁線から方形プランの平面形を推定できる。

S T 2 の場合は、掘り込まれた遺構として性格は明瞭であった。遺物出土状況は、次の通りである。床面直上からは第Ⅲ群土器が、覆土からは第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器と第Ⅳ群土器が、覆土の上層からは第Ⅳ群土器が出土している。S T 2 の下方斜面では、第Ⅱ群土器も第Ⅲ群土器も出土してくれる。しかし、地層の流れからみて自然であり、垂直分布においていずれも第Ⅳ群土器の下位レベルである。精査して検出した S T 2 の部分は、壁周からして全体の約強であり、面積からして約程度である。くの字形の壁周からみて方形プランを有することは確かであろう。

第3の問題点は、S T 2 内部の石組遺構の問題である。位置的に S T 2 の中央に事前調査の試掘区があり、その中央に石組遺構が検出されたのであるが、その性格が問題なのである。層位的にも遺物の出土状況も基本的に S T 2 と差異はない。その直上より出土した唯一の土器片が第Ⅲ群土器であり、S T 2 と同一年代を推定せざるを得ない。S T 2 の覆土を掘り込んで構築された状況を全く認知できなかった。したがって、S T 2 の内部施設とみることができる。

この石組遺構を、屋内炉としてみると、それともそれ以外の施設としてみると、先ず屋内炉としてみれば、S T 2 の床面全体からみてレベルがわずかに高いように感ずる。一般に早期の屋内炉は地床炉か掘込炉である。石組炉の例はない。炉であれば床面のレベルより若干掘り込まれた方が自然であるので、逆に見えるのである。石組みに用いた石や炉床が火熱を受けた痕跡がなければならないのに明瞭でない。炉以外の屋内施設としてみれば、何なのであろうか。石組みの下を深く掘ってはいいので埋葬施設とは考えられない。このような類例も知られていない。

先ず、この石組み遺構が火熱を受けているかどうかであるが、わずかに火熱を受けている痕跡が炉床とみられる土層にあることである。また、石組み下部の掘り方が石組炉の場合と同じであるし、用いた石材は花崗閃緑岩で少々の熱を受けても変色・変質しない（註3）ことである。石組みのレベルが S T 2 の床面レベルより大きく高い位置にあるわけではなく、微妙な高さであることである。以上からして S T 2 の屋内炉とみることができる。

目黒吉明氏によると、石組炉は旧石器時代に発生し、縄文時代になってからは福井洞窟3層（隆線文土器の時期）の例を最古とし、竪穴住居の屋内炉としては北海道中野A遺跡（梁川町式=早期末葉）をはじめ北海道の早期末葉の遺跡にみられるのを初現としている。また、前期に入つてからも一般化はされないが、例外的に存在し、中期に入つて一般化するという（註4）。本県の場合は、大石田町庚申町遺跡の大木1式期のものが最古の例である。

このような状況からみて、縄文時代早期において、竪穴住居の屋内炉として、一般化されない形

で出現することは十分に考えられることである。したがって、S T 2 内部の石組み遺構を屋内炉として位置づけることができよう。

第 4 の問題は、S X 1 の性格である。先ず、S X 1 の掘り方境界界面が混雜で、人為的に掘り込まれた遺構とは見ることができない。しかも形成時期が、本遺跡の第Ⅱ層堆積以後であり、遺跡とは直接結びつかないのである。

次に S X 1 の断面セクションを見ると、中央部分の埋土は縦に平行に並び、その上中央から南側へ 1 層・2 層群・3 層群と順序よく並んでいる。また、Ⅲ層と対比できる 3 c 層が木の根によって引きずり上げられたような状態で上にもち上げられている。東壁セクションにおいても同様の状況がうかがえる。木が倒れた時でもできたすきまに流れ込んだとみられる第 I 層起源の黒色土が底に広がり、3 c 層が持ち上げられた様子よりも鮮明にあらわれている。

これらの状況は、いずれも木の根が倒れながら回転した際に周囲の土も一緒に動かしたこと示している。そして、断面に見える土の動きや最深部（中心）の位置などから考えて、この木は北西方向へ倒れたものと想定できる。

地層の層位が攪乱される要因の一つに周氷河現象がある。しかし、この S X 1 に関しては埋土層の状態がまとまって瞬時に動いているという点、および形成時期の点で周氷河現象によるものとは考えられない。

以上によって、S X 1 は強風が木を倒してできた風倒木痕または人為的な抜根作業によって形成されたものと考えられる。しかし、そのいずれであるかを断定する資料は、今のところ見つかっていない。

（註 1）加藤 稔 「山形県内の住居跡」『岡山』山形県教育委員会 1972 年

（註 2）手塚孝・菊地政信『桑山団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書・第Ⅱ集』米沢市埋蔵文

化財調査報告書第 8 集 米沢市教育委員会 1983 年

（註 3）菅井敬一郎氏の御教示による。

（註 4）日吉吉明「住居の炉」『縄文文化の研究 8』雄山閣 1982 年

表1 山形県内における縄文時代早・前期の住居跡(1)

No	遺跡名	遺構名	平面形	大きさ	柱穴	炉	年代	註
1	米沢市八幡原No5	ST2	楕円形	M M 3.8×3.2	主・支柱穴	無	桑山I (福荷台)	①
2	同上	ST5	円形	M M 5.6×5.1	壁柱穴	地床炉	同上	①
3	同上	ST11	楕円形	M M 5.2×4.5	支・壁柱穴	無	同上	①
4	同上	ST19	隅丸方形	M M 3.8×3.4	主・支柱穴	地床炉	同上	①
5	米沢市八幡原No5	ST7	長円形	M M 4.5×3.8	壁柱穴	無	須刈田 (田戸下層)	①
6	同上	ST12	円形	M M 4.0×3.7	壁柱穴	無	同上	①
7	同上	ST15	隅丸方形	M M 4.7×3.4	主・壁柱穴	無	同上	①
8	同上	ST18	楕円形	M M 6.4×5.0	壁柱穴	無	同上	①
9	南陽市須刈田大野平	1号住居跡	隅丸方形	M M 4.2×4.2	主・支柱穴	掘込炉	同上	②
10	米沢市八幡原No5	ST1	楕円形	M M 4.1×3.5	主・壁柱穴	無	尼子Ⅲ (出戸上層1)	①
11	同上	ST4	円形	M M 4.0×4.0	主・壁柱穴	無	同上	①
12	同上	ST6	略円形	M M 4.8×4.4	壁柱穴	無	同上	①
13	同上	ST9	円形	M M 3.3×3.2	壁柱穴	無	同上	①
14	同上	ST13	楕円形	M M 6.1×5.2	壁柱穴	無	同上	①
15	米沢市八幡原No5	ST10	円形	M M 4.0×3.7	壁柱穴	無	赤石Ⅱ (田戸上層1)	①
16	同上	ST14	楕円形	M M 4.8×4.0	壁柱穴	無	同上	①
17	同上	ST17	長楕円形	M M 6.1×3.7	壁柱穴	無	同上	①
18	舟形町大畠山	5号住居跡	楕円形	M M 5.0×3.5	主・支柱穴	掘込炉	同上	③
19	米沢市八幡原No24	2号住居跡	隅丸方形	M M 2.6×2.2	主・壁柱穴	地床炉	八幡原No24 (田戸上層2)	④
20	舟形町大畠山	1号住居跡	長方形	M M 4.1×4.5	主・支柱穴	地床炉	同上	③
21	同上	3号住居跡	?	?	主・支柱穴	地床炉	同上	③
22	同上	6号住居跡	隅丸方形	M M 5.0×5.0	主・支柱穴	掘込炉	同上	③
23	川西町千松寺	ST2	略円形	M M 7.0×6.0	壁柱穴	地床炉	同上	⑤
24	米沢市八幡原No5	ST8	隅丸方形	M M 4.6×4.3	壁柱穴	無	大畠山Ⅲ (野島)	①
25	同上	ST17	長楕円形	M M 6.1×3.7	壁柱穴	無	同上	①
26	遊佐町金俣B	1号住居跡	円形	M M 3.0×3.0	主柱穴	無	金俣B (吉井上層)	⑥
27	西川町弓張平A	ST10	方形	M M 3.0×3.0	主・支柱穴	無	早期中葉	⑦
28	同上	ST20	方形	M M 3.5×3.1	主・支柱穴	無	早期中葉	⑦
29	山形市にひゃく寺	ST3	隅丸方形	M M 5.3×4.8		無	同上	⑧
30	同上	ST9	楕円形	M M 5.2×2.9		無	同上	⑧
31	川西町千松寺	ST1	円形	M M 3.3×2.7	壁柱穴	地床炉	早期末葉	⑤
32	山形市にひゃく寺	ST5	隅丸方形	M M 5.3×4.8			早期末～前期初	⑧
33	同上	ST6	楕円形	M M 3.6×3.3			同上	⑧
34	同上	ST7	楕円形	M M 4.1×3.6			同上	⑧

表2 山形県内における繩文時代早・前期の住居跡(2)

No	遺跡名	遺構名	平面形	大きさ	柱穴	炉	年代	註
35	山形市にひゃく寺	S T 8	隅丸方形	M 4.5 × 4.?			早期末～前期初	⑧
36	同上	S T 10	楕円形	M 5.5 × 4.1			同上	⑧
37	同上	S T 11	楕円形	M 4.6 × 2.9?			同上	⑧
38	舟形町大畠山	2号住居跡	長方形	M 4.7 × 6.2	主・支柱穴	掘込炉	上川名2	⑨
39	米沢市法将寺	H Y 50	隅丸長方形	M 3.6 × 2.3	壁柱穴	地床炉	前期初頭	⑨
40	同上	H Y 51	隅丸方形	M 5.2 × 4.1	壁柱穴	掘込炉	前期初頭	⑨
41	同上	H Y 52	隅丸長方形	M 5.0 × 2.5	壁柱穴	地床炉	大木1	⑨
42	小国町墓塚	73号住居跡	長方形	M 17.6 × 6~8	主・支柱穴	地床炉	大木1	⑩
43	尾花沢市いるかい	S T 6	長方形		主・支柱穴	地床炉	同上	⑪
44	東根市小林A	2号住居跡	長方形	M 9.9 × 4.7	主・支・壁	地床炉	大木2	⑫
45	同上	第1次住居跡	方形	M 5.0 × 5.0	主柱穴	地床炉	大木2~3	⑬
46	同上	1号住居跡	円形	M 2.3 × 2.3	主・壁柱穴	掘込炉	大木3	⑭
47	村山市東原	住居跡	方形	M 4.5 × 4.9	主・支柱穴	掘込炉	大木4	⑮
48	尾花沢市いるかい	S T 2 a	隅丸方形	M 4.5 × 4.0	主・支柱穴	地床炉	大木5	⑯
49	同上	S T 2 b	略長方形	M 5.0 × 3.0	主・支・壁	地床炉	同上	⑰
50	南陽市須刈田大野平	2号住居跡	長方形	M 3.4 × 3.9	主・支柱穴	掘込炉	大木6	⑲
51	大石田町角二山	1号住居跡	長方形	M 2.1 × 2.9	主柱穴	地床炉	同上	⑳
52	同上	3号住居跡	円形	M 2.1 × 2.1	主柱穴	無	同上	㉑
53	鶴岡市岡山	3号住居跡	隅丸方形	M 2.5 × 2.5	主・支柱穴	地床炉	同上	㉒
54	同上	6号住居跡	円形	M 5.5 × 5.2	主・支柱穴		同上	㉓
55	同上	7号住居跡	円形	M 4.0 × 4.0	主・支柱穴	地床炉	同上	㉔
56	同上	8号住居跡	円形	M 5.0 × 5.0	主・支柱穴	掘込炉	同上	㉕
57	鶴岡市岡山	10号住居跡	円形	M 4.0 × 4.0	主・支柱穴	地床炉	大木6	㉖
58	遭佐町吹浦	1号住居跡	長方形	M 2.4 × 2.9	主・支柱穴	掘込炉	大木6(吹浦)	㉗
59	同上	2号住居跡	長方形		主・支柱穴	地床炉	同上	㉘
60	同上	八号住居跡	長方形		主・支柱穴	地床炉	同上	㉙
61	同上	B区住居跡	長方形		主・支柱穴	地床炉	同上	㉚
62	同上	341 a号住居	楕円形	M 4.5 × 4.0	主・支・壁	地床炉	同上	㉛
63	同上	341 b号住居	長方形	M 4.1 × 3.2	壁柱穴		同上	㉜
64	同上	391 a号住居	隅丸方形	M 4.3 × 3.4	主・支・壁		同上	㉝
65	同上	391 b号住居			壁柱穴	地床炉	同上	㉞
66	同上	391 c号住居	楕円形	M 6.0 × 4.8	主・支・壁	地床炉	同上	㉟
67	同上	391 d号住居	楕円形	M 5.1 × 4.5	主・支柱穴	地床炉	同上	㉟

※ 本表は、各註の文献によって作成した。なお、平面形については「不整」という表現を割愛しているもの、大きさについては少数点以下1桁まで四捨五入方式で記載したもの、柱穴については執筆者の判断によるものがある。さらに年代の欄の土器型式は執筆者による名称のものを用いてある。

- 註 ① 手塚孝・菊地政信 『埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集』 米沢市埋蔵文化財調査報告書 第8集 米沢市教育委員会 1983年
- ② 奥山忠彦 「宮内町須刈田大野平遺跡調査概報」『山形考古』第8号 山形考古友の会 1961年
- 加藤 稔 「山形県内の住居跡」『岡山』 山形県教育委員会 1972年
- ③ 加藤 稔 「山形県内の住居跡」『岡山』 山形県教育委員会 1972年
- ④ 手塚 孝 「Na24(清水北C)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内 埋蔵文化財調査報告書』第2集 米沢市教育委員会 1976年
- ⑤ 手塚 孝 『千松寺遺跡発掘調査報告書』 川西町埋蔵文化財調査報告書 第1集 川西町教育委員会 1980年
- ⑥ 佐藤栄宏・酒田中央高等学校社会研究部 「庄内地方における考古学的研究第4報 — 遺跡の分布と性格(2) — 」『酒田中央高等学校研究集録』I
- 加藤 稔 ③に同じ 1972年
- ⑦ 阿部明彦 『弓張平A遺跡発掘調査報告書』 山形県西村山郡西川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 西川町教育委員会 1980年
- ⑧ 阿部 実 『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第92集 山形県教育委員会 日本道路公團仙台建設局 1985年
- ⑨ 手塚孝・菊地政信・龜田晃明・小松佳子 『法将寺』 米沢市埋蔵文化財調査報告書 第12集 1985年 米沢市教育委員会
- ⑩ 佐藤正俊・名和達朗 『墓塚遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第58集 山形県 山形県教育委員会 1982年
- ⑪ 阿部明彦 『いるかい遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第69集 東北農政局 山形県教育委員会 1983年
- ⑫ 佐藤鎮雄・佐藤正俊 『小林遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第8集 山形県教育委員会 1976年
- ⑬ 加藤稔・保角里志他 『小林遺跡』 東根市教育委員会 1975年
- ⑭ 加藤 稔 ③に同じ 1972年
- ⑮ 加藤 稔 ③に同じ 1972年

- ⑩ 加藤 稔 ⑨に同じ 1972年
⑪ 柏倉亮吉・江坂輝弥・酒井忠一・加藤 稔 「吹浦遺跡」 1955年
⑫ 渋谷孝雄 『吹浦遺跡 第2次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第93集 建設省東北地方建設局 山形県教育委員会 1985年

2 大野平遺跡の早・前期の土器

これまで大野平遺跡の土器を、本木氏による収集、第1次調査出土、第2次調査出土に分けて、それぞれ述べてきた。しかし、それらは、別々の土器型式に相応するものではなく、整理してまとめることが必要である。以下に整理しておく。

- 大野平第I群土器（本木氏第1類、第1次第1類、第2次第I群）
大野平第II群土器（本木氏第2類、第3類、第1次第2類、第3類、第2次第II群）
大野平第III群土器（本木氏第4類、第2次第III群）
大野平第IV群土器（本木氏第5類、第1次第4類、第2次第IV群）
大野平第V群土器（第1次第5類）
大野平第VI群土器（本木氏第6類、第1次第6類）
大野平第VII群土器（本木氏第7類）
大野平第VIII群土器（本木氏第8類、第1次第7類）
大野平第IX群土器（本木氏第9類、第1次第8類）
大野平第X群土器（本木氏第10類）

以上のうち、大野平第V群土器が大木5式、大野平第VI群土器が大木6式、大野平第VII群土器が新崎式、大野平第VIII群土器が大木7b式、大野平第IX群土器が大木8a式、大野平第X群土器が大木10式に相当することは、先に述べたことからも明らかである。

なお、大野平第VII群土器は移入された北陸地方の新崎式に比定されるものであるが、これにより従来この時期の北陸系土器が、大木系の文化圏を飛び越して秋田県に入り込んでいる（註1）ことをふまえれば、一つの問題を提起していることになる。

さて、土器編年と分布において問題となるのは、大野平第I群～第IV群土器である。これらは、東北地方の早期・前期の土器として見た場合、複雑な様相がみられるため、編年が確立されていないところの土器群に相当するのである。その大要については第8章でふれることにして、ここでは概略について述べる。

これらの4群の土器の出土状況については第2次調査において詳しく把握できた。概要を述べれば、次の通りである。

全体として破片も小さく、数は多いようにもみえるが、個体数が少ない印象を受けた。第II群土

型 式	大野平遺跡	大野平遺跡土器群	県内 の 土 器 群	県外の土器群
田戸下層式				
田戸上層式	第Ⅰ群土器			
子母口式	—			
野鳥式	—			
鶴ヶ島台式				
秦山Ⅱa式	第Ⅱ群土器			
秦山Ⅱb式				
上川名Ⅰ式				
梨木畑式	第Ⅲ群土器			
船入島下層式				
上川名Ⅱ式	第Ⅳ群土器			

第33図 大野平遺跡と他の遺跡における縄文早・前期の土器

器は発掘区全体に分布し、個体数も多いと思われるが、その他の土器は発掘区内での分布が偏在している。とくに第Ⅳ群土器は1~2個体程度であると思われる。これは発掘区の遺跡全体に占める位置的な問題も考えられるが、大野平遺跡の性格も表しているとも考えられる。

このような出土状況もふまえて、これらの土器群の時期と所属を検討した結果次のことがいえる。

大野平第Ⅰ群土器は関東地方の田戸下層式に、大野平第Ⅱ群土器は関東地方の鶴ヶ島台式に並行する。第Ⅱ群土器には、第2次調査第Ⅱ群第3類のように胎土・条痕文の状態からみて他と異なる印象をもつものもある。大野平第Ⅲ群土器は、早期末葉の土器群であるが、具体的な型式は特定できない。大野平第Ⅳ群土器は東北南部の上川名Ⅱ式あるいは関東地方の花積下層式に並行する前期初頭の土器群である。このような関係を整理すると、第33図のようになる。

(註1) 藤田富士夫 「日本海文化の国際性」 『日本の古代』第2巻 1986年 中央公論社

3 山形・宮城両県における箇状石器の地域性

—原石と石器形態差に関する予察—

(1) はじめに

同一器種内の石器群で、大きさの違いが発生する要因について、かつて筆者は用途差・刃部再生等について調べたことがあった(註1)。今回は、その時明確にすることが出来なかった、大きさの地域的な傾向性について、山形・宮城県内出土の箇状石器に着目し、その発生原因を探ることを目的としている。

石器の形態は、自然的環境と歴史的、社会的環境の影響により決定されていると考えられるが、それはどのような形で形態を左右しているのだろうか。今回は、そのような問題の一つとして、石器の原石の需給関係と石器の大きさとの関係について調べてみたい。尚、資料とした箇状石器の石材等については、各報告書を参考とし、一部記載のないものについては筆者の目視観察とした。

(2) 資料の定義

山形県内における箇状石器をめぐる研究状況は、定義のあいまいさもさることながら、用語の混乱もはなはだしい状況にある。

それは、多くの報告書記載例が示すように、珪質頁岩を素材とし平面形態が橢形・短冊形の片刃を呈する大形の石器群を、打製石斧として捉える一般的な認識がある。このような状況は、異なる名称を用いて同一器種の石器群を分類することとなっている。

このような混乱発生要因は、いくつか考えられる。

① 県内出土の箇状石器が、八幡氏の定義(註2)した4cm内外という設定値よりも、明らかに大

形の物を主体としており、石鎧でない可能性を示していた。

- ② 石器群相互の系譜関係が不明で、鎧状石器や打製石斧が緩慢に捉えられていたこと。
- ③ 硬い珪質頁岩を素材としている物が主体を占め、関東・中部地方に分布の中心をもつ打製石斧類似資料があまり発見されていなかったこと。

以上の諸点は、県内を含めた地域の鎧状石器・打製石斧の定義の緩慢さと深く係わっており、それらの問題解決も重要な一因を占ると考えられる。しかし、現在、東北南部の縄文時代中期以後の諸遺跡からは関東・中部地域を中心に分布している打製石斧類似資料が、石器組成中一定の頻度で出土している状況を考えれば、打製石斧という名称は、それらの一群の石器群に限定して使用した方が全日本的な理解となりやすく、現在の混乱の一部を回避できると考えられる。

そこで、本論に於ては、それらの石器群以外のものを鎧状石器として捉えることとしその概念を設定し、研究を進めることとした。石材は珪質頁岩を主体とし、平面形態は撥形・短冊形をしている。機能部分の刃部と、柄に固定されたと考えられる基部より成り立っており、いずれの部分にも使用痕が観察される。また、打製石斧のように、側面に敲打痕が施されることはない。

尚、更に、刃部形態や製作技術等によって分類されるが、本論と直接関係ないので、別の機会に譲りたい。

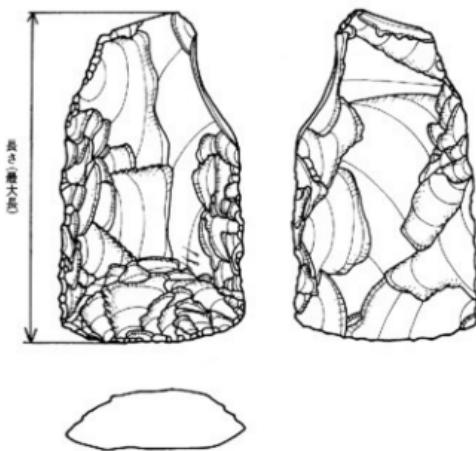
(3) 各遺跡における状況

珪質頁岩を石材の主体に使用している鎧状石器は、山形・宮城両県内に多数散在するが、各遺跡ともそれほどまとまっている資料は少ない。以下各遺跡の概要を述べながら、鎧状石器の大きさ（長さ）について調べてみたい。尚、鎧状石器の属性の中で、原石や素材となった剥片の大きさが最も表わされる部分が長さという属性であることから、比較計測することにしたのである。

A 山形県側の遺跡

a 庚申町遺跡（北村山郡大石田町大字大石田）

昭和46年～56年まで5次の調査が、山形大学・大石田町教育委員



第34図 鎧状石器長さ計測部分図



第35図 遺跡分布図

会によって行なわれており、その結果縄文時代前期上川名II式～大木2式の集落跡であることが判明している。しかし、籠状石器についての詳細な発表が少なく、今回は中嶋氏が昭和48・49年度調査資料をまとめられた報文を使用する（註3）。

籠状石器類似資料は、合計24点出土しているが、大きさや形態によって打製石斧12点、様器状石器9点に分類されている。しかし、刃部が片刃になるような調整剝離の特徴や、二種類に分類されたものの大ささにそれほど差がないことから同一器種の籠状石器と考えられる。第36図は完形品16点の大きさを示したものである。最少で4.3cm、最大8.8cm、平均値6.9cmを示す。石材は1点石英以外、珪質頁岩である。

尚、その後の調査によって（大石田町教育委員会、1984），10cm以上の大型品も含まれていることから、上記調査資料は、比較的平均値が低くおさえられていると考えられる。

b 八幡原No.5遺跡（註4）（米沢市万世町桑山字柿の木）

桑山閉地造成にともない米沢市教育委員会によって調査が行なわれた。縄文時代早期田戸上層・田戸下層式を主体とする住居跡群が18棟発見されている。しかし、有舌尖頭器や早期末の資料が含

まれており、資料の時期を限定できない。住居跡内出土の鎌状石器は完形品47点を数えることができる。平面形態は撥形が主体を占め、刃部は片刃を呈す。石材は全て珪質頁岩である。最小の物は4.5 cmで最大の物は13.5 cmの長さをもち平均値7.7 cmを示す。大形と小形のバラツキが大きい。

c 早坂台遺跡（註5）（東田川郡立川町大字肝煎字早坂）

昭和55・56年度に渡って、立川町教育委員会によって発掘調査が行なわれている。調査の結果縄文時代前期末大木4～6式を主体とした集落跡であることが判明している。鎌状石器や打製石斧と分類されているものは合計397点出土しており、出土石器類の8.6%を占める。

筆者は、かつて比較的形の整っている鎌状石器29点について観察したことがある。それらは、平面形態は撥形が主体を占め、背面はフラットな面によるという特徴がある。使用痕は刃部・基部に認められ、刃部は縱方向の擦痕が観察される。また刃部には再生が観察された。石材は全て珪質頁岩である。第36図は完形品29点の長さを示したものである。最小は6.2 cm、最大は15.7 cm、平均値は8.8 cmを示す。

d 弓張平A遺跡（註6）（西村山郡西川町大字志津字弓張平）

昭和54年に西川町教育委員会によって調査が行なわれている。遺構は、土壌・住居跡が確認されている。第Ⅱ層出土土器の時期より縄文時代早期田戸上・下層式並行期と考えられる。鎌状石器は、撥形・短冊形で刃部は片刃のものであり11点出土している。石材は全て珪質頁岩である。最小は4.4 cm、最大11.8 cmで平均値8.7 cmを示す。

e 大淵台遺跡（註7）

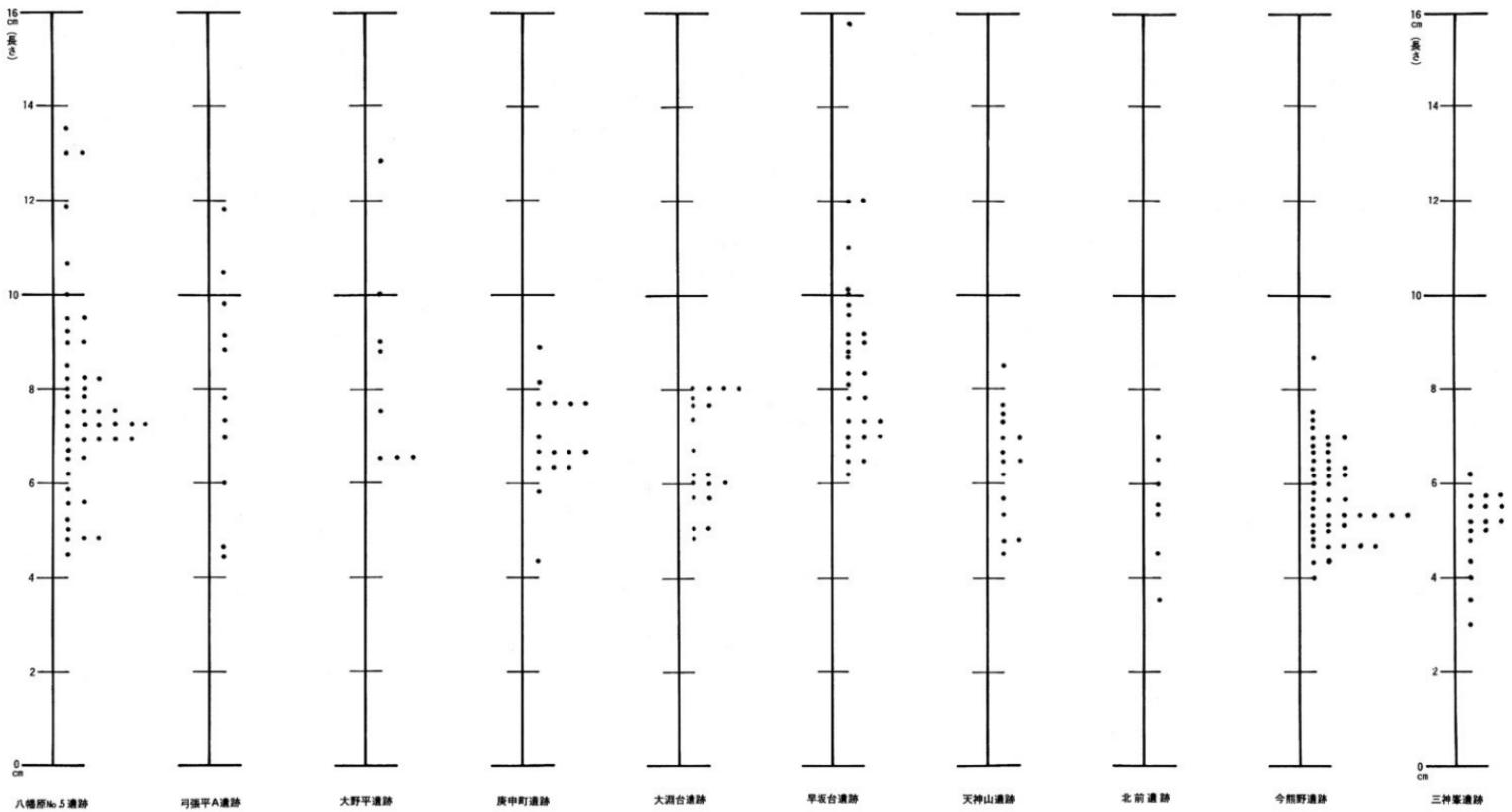
温海川ダム建設にともない山形県教育委員会によって調査が行なわれている。遺構は土壌・埋設土器・集石が確認されている。出土土器の時期から縄文時代早期中葉の田戸下層式から、縄文時代前期の大木6式に比定されるものまで出土しているが、出土量の主体は縄文時代早期後半から縄文時代前期初頭の時期に集中している。出土石器70点のうち鎌状石器が26点と最も多い。石材は全て珪質頁岩であるが、多くは風化が進んでザラザラした粗いものであり、特徴的である。平面形態は撥形を主体とし、刃部は片刃である。完形品19点で最小4.8 cm、最大8.1 cm、平均値6.7 cmを示す。

B 宮城県側の遺跡

a 三神峯遺跡（註8）（仙台市富沢字金山）

昭和42・48・50年の三度に渡る調査が行なわれている。今回は資料の摘要である。昭和50年の調査成果を引用したい。

遺構は、堅穴住居跡5軒、土器埋設遺構1基及び多数のビットが確認されている。出土土器は、縄文時代前期初頭の大木1式～2a式に属しているものが主体を占める。鎌状石器は住居跡・包含



第36図 各遺跡の籠状石器長さ分布図

層出土資料を含め25点出土しており、その内大きさを測定できる完形品は18点ある。石材はほとんどが頁岩を使用している。平面形態は撥形が主体を占めている。背面の両側縁への調整剝離が特徴的に施される。実測図によれば、刃部は片刃になっている。第36図は完形品18点の長さを示したものである。最小は3.0cm、最大は6.2cm、平均値は4.8cmを示す。

b 北前遺跡（註9）（仙台市山田字北前）

昭和56年に仙台市教育委員会によって調査が行なわれている。三神峯遺跡の西方2.5kmに位置している。前期旧石器時代の遺物の他、縄文時代早期末（縄文条痕土器群）の住居跡7軒、土墻4基、縄文時代前期末（大木6式）の土墻19基、縄文時代中期末（大木9式）の住居跡2軒、その他平安時代・江戸時代の遺構が確認されている。縄文時代の出土石器総数は1,164点あり、鎌状石器は13点出土している。その中で属性表が報告されている完形品7点についての長さを表わしたのが第36図である。平面形態は撥形、刃部は片刃が主体を占める。石材は、珪質頁岩の物が2点と少なく、流紋岩・珪化凝灰岩が各2点ずつある。石匙・石錐・尖頭器・石鎌の多くが珪質頁岩であるとの対象的である。最小3.6cm、最大7.2cm、平均値5.5cmを示す。

c 今熊野遺跡（註10）（名取市高館川上字南台・字北台）

三神峯遺跡の南4kmに位置する。縄文時代前期初頭大木1・2a式を主体とする遺跡である。多数確認されている住居跡の形態から、三神峯遺跡との類似が指摘されている。

鎌状石器は73点出土し石器組成の8.1%を占める。刃部形態は片刃が主体であるが、両刃が16%出土している。石材の主体は珪質頁岩とされており、珪化凝灰岩を含む。第36図は完形品47点の大きさを示したものである。最小は4.0cm、最大は8.7cm、平均値は5.8cmを示す。

d 天神山遺跡（註11）（玉造郡岩出山町轟）

縄文時代早期末を主体とした遺跡である。石鎌と打製石斧に分類されているものが16点ある。石材は珪質頁岩が50%を占め、その他石英安山岩質凝灰岩等がある。第36図は完形品15点の大きさを示したものである。最小4.7cm、最大8.5cm、平均値6.4cmを示す。

C 山形・宮城県内における状況

資料的に多くはないが、山形県と宮城県という、奥羽山脈によって隔てられた地域の、大きさによる形態差を比較し、その特徴を明らかにしてみたい。

山形県内の資料は一般に4~13cm程の長さをもつ資料が分散して存在する傾向がある。平均値も6.7cm~8.9cm内にあり、宮城県内出土資料と比較すれば大きなものである。時代的な特徴としては、縄文時代早期中葉頃の八幡原No.5・弓張平A遺跡の平均値7.7~8.7cmの分散傾向から縄文時代前期初頭の庚申町・大淵台遺跡の平均値7.0cm弱の収束傾向が指摘できる。

しかしながら一方で県内における地域性の存在も推察することが可能である。縄文時代前期末の早

坂台遺跡や縄文時代中期前・中葉の東興野B遺跡の平均値8.8・9.1cmの大形品優勢の傾向は、他の該期の資料には認められず、最上川下流域の地域性が窺える（註12）。

宮城県内の資料は、一般に4～8cm内に収束する傾向がある。石材は珪質頁岩を主体としながらも、遺跡によっては、客体となる場合もある。時代的な傾向は、縄文時代早期中葉の該期の資料が不明でなんともいえないが、早期末～前期初頭に於ける資料は平均値6cm前後に収束する傾向がある。

山形・宮城県内に於ける縄文時代早期末～前期初頭の、長さの収束傾向は時代性と深い結び付きが考えられるが、地域性としては山形県内出土資料がいくぶん平均値が高いという傾向がある。

(4) 硅質頁岩と地質構造の違い

10cm前後の大形品を作り出すためには、大形の原石が必要であるが、山形・宮城県内の地質構造の違いについて調べ考察の糧としたい。

山形県内の地質は、古生代二疊紀・中世代白亜紀の結晶片岩・粘板岩・大理石が県南部の小区域に分布するのみで、県内を広く覆っている基盤岩は、この時変成作用を及ぼした中世代の花崗岩である。この基盤岩の上に新第三紀の海底に堆積した泥岩・砂岩・礫岩・凝灰岩が厚く堆積している。この堆積岩は古い方から及位層・金山層・草薙層・古口層・三盛層に細分されている。一般に古い堆積岩ほど統成作用が進んで硬いという傾向がある。しかし、県内に広く分布している頁岩は、石器に利用されるほどの硬度もなく緻密でもない。では、県内の石器として利用されている珪質頁岩は、どのような成因によって発生したものだろうか。

筆者が置賜盆地内の露頭面を観察した結果によれば、2つの発生パターンがあるようだ。第1は、米沢市小野川や飯豊町中津川のように、古口層・草薙層の頁岩が溶岩の貫流によって熱変成を受け、硬い緻密な珪質頁岩に十数メートルに亘って変化しており、それが、風雨の侵蝕作用によって太田川や白川に転石となって分布している状況があった。第2は、米沢市東部のグリンタフ地帯の例のようにグリンタフ（緑色凝灰岩）の中に珪質頁岩が含まれている（凝灰角礫岩）。凝灰角礫岩の発生は、グリンタフ期の火山活動の際に、噴山源の付近の堆積岩が火山噴出物と共に珪化し再堆積したものである。第1・2の例は、いずれも頁岩が熱変成によって珪化している事に変りないが、第1の場合は大きな固まりの珪質頁岩となり、第2のものは、その多くは拳程度である。このように新第三紀中新世の泥岩・砂岩の発達と火山活動による熱変成という相乗効果が、珪質頁岩発生の要因となっているものと考えられる。

尚、山形県と宮城県の地質構造上の大きな特徴として、奥羽山脈より西側の地域は、グリンタフ変動によって、新第三紀に海底に沈んだので、山形県内（弧内帯）にはその期間に堆積した頁岩が広く厚く分布しているが、宮城県（弧外帯）ではその発達が小さかったこと。更に、火山活動

に於いても、奥羽山脈の西側に多く分布している（火山フロント）。これらのこととはグリントフ地域に於ける珪質頁岩発達の条件が、非常に恵まれていることを意味している。これらは県内的一部の河川に多量に転石となつて分布している珪質頁岩のあり方とも符合するものである。

(5) 石材と形態差について

以上のような地質構造の違いから考えられる大きさの形態差について考えてみたい。

宮城県内に於ける、珪質頁岩以外の石材が高い頻度で使用されている北前・天神山遺跡の存在は、同地域に於ける珪質頁岩入手の困難さを窺うことができる。また、山形県内資料に比べ早期末～前期初頭の平均値が低い傾向性は、原石の大きさや入手困難さからくる、刃部再生と深い関係があるのではないだろうか。使用痕と刃部再生剥離の切合関係の観察が望まれる。三神峯・今熊野遺跡といった珪質頁岩主体の遺跡は、比較的遠方からの交易ということを考えなければならないだろう。現在、宮城県内における珪質頁岩の自然分布状況はほとんど調べられておらず、その内容についても不明な点が多い。しかし、すでに述べたような地質構造の違いにより発生する珪質頁岩の分布の濃淡は、鎧状石器の石材の使用頻度や大きさの形態差としてあらわれているものと考えられる。

尚、宮城県域に於ける全ての珪質頁岩を、山形県側からもたらされたとは考えられず、宮城県内に於ける原石分布状況の調査や理化学的な産地同定の必要性がある。

反対に、多量に石材の存在する山形県域に於いては、大形・小形品を自由に作り出すことができる。大きさの分散傾向は、そのような石材の需給関係や、器種内の用途差を示しているのではないだろうか。その結果、石材産地内に存在する県内の遺跡出土資料の大形のものを打製石斧として分類する傾向性が生じたものと考えられる。このような大きさの形態差は、珪質頁岩という石材の分布状況と深く係わり、発生したものと考えることができる。尚、すでに指摘した最上川下流域の大形品優勢の傾向性は、さらに同地域内に於いても地域性が存在することを示しているものと考えられる。

(6) まとめ

すでに述べたように石器の大きさの形態差と石材の需給関係には、相関関係が指摘できる。それは、原石の多量に存在する地域の珪質頁岩の使用頻度の高さや大形品の優性、そして長さの分散傾向が特徴的に認められる。逆に、原石の少ない地域の、石材の種類のバラエティ化と長さの収束傾向という様に、まとめる事ができる。また、山形県内の大形品優勢の傾向性は、器種の違いから発生したものではなく（打製石斧と鎧状石器）、同一器種の原石からくる地域性として捉えることができる。

本資料とした鎧状石器にかぎらず、原石の需給関係が石器の形態に影響したと考えられる現象はいくつか考えられる。旧石器時代の石刃技法の発達した地域の東山型・杉久保型ナイフの分布状況も原石との関係で理解できないのだろうか。今後の研究が望まれる。

最後となりましたが、本文作成にあたり、御教示を賜った阿部明彦・阿部恵・植松芳平・小川出・岡村道雄・佐藤庄一・渋谷孝雄・田宮良一・丹羽茂の各氏、また資料作成に便宜をはかっていただいた、山形県教育委員会、宮城県教育委員会、西川町教育委員会に対してお礼申し上げます。

註

- 1 秦昭繁 「生活の場における石器の形態差発生要因とその具体例」 『砂川A遺跡』 朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 山形県朝日村教育委員会 1984年
- 2 八幡一郎 「奥羽の鎧状石器」 『人類学雑誌』50巻5号 1935年
- 3 中嶋寛 「大石田町庚申町遺跡について」 『山大史学』第5号 1976年
- 4 手塚孝・菊地政信 『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅱ集』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集 米沢市教育委員会 1983年
- 5 秦昭繁 「山形県早坂台遺跡の片刃鎧状石器について」 『山形考古』第3巻第4号 1985年
- 6 阿部明彦 「弓張平A遺跡発掘調査報告書」 西川町教育委員会 1980年
- 7 渋谷孝雄・佐藤正俊 『大淵台遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会 1981年
- 8 佐藤則之 『三神峯遺跡発掘調査報告書』 仙台市教育委員会 1980年
- 9 佐藤洋他 『北前遺跡』 仙台市教育委員会 1982年
- 10 小川出・阿部恵両氏のご教示によって作成した。
- 11 小徳晶 『天神山遺跡』 宮城県教育委員会 1982年
- 12 渋谷孝雄 『東興野B遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会 1981年

4 大野平遺跡第2次調査出土石器の石材について

(1) 石材の分類 (第31~32図)

① 石 鐵 (第31図1~5)

石鐵の石材は、流紋岩が4点、珪質頁岩が1点である。

② 石 錐 (第31図6~7)

石材は、流紋岩と珪質頁岩製である。

③ 鑓状石器（第31図8～14）

鑓状石器の石材は、流紋岩5点、珪質頁岩2点である。

④ 撥 器（第31図15～16）

石材は、流紋岩と珪質頁岩製である。

⑤ 不定形石器（第31図17～第32図22）

この石器の石材は、流紋岩製4点、珪質頁岩製2点である。

⑥ 磨 石（第32図23～25）

磨石3点は、花崗閃綠岩、半花崗岩と砂岩製である。

⑦ 凹 石（第32図26～27）

石材は、流紋岩製である。

(2) 石材の考察

大野平遺跡から発掘された石器27点の器種は、前述のとおりである。この中で、磨石3点と凹石2点の計5点を除く石器22点は、加工されている石器である。

石材の種類をみると、加工石器の石質は、流紋岩15点、珪質頁岩7点であり、全体の80%を越える。これに対し無加工石器は、凹石が流紋岩、磨石は、花崗閃綠岩、半花崗岩と砂岩である。

以上から石器の石質を考察すると、加工石器は緻密で堅硬な石英質の流紋岩と珪質頁岩が用いられている。その中には、貝殻状または亜貝殻状断口の剝離面をもつ石器もある。

無加工石器の凹石は、これも緻密で堅硬な流紋岩であるが、磨石3点は、それぞれの石種は違う。

出土石器について、その石材の原石を考察してみる。

花崗閃綠岩類2点は、この地域の中生代の基盤岩であり、広く分布しているのでどこからでも採集できる。

石器の80%を越える流紋岩類と珪質頁岩は、恐らく新生代新第三紀の岩石であり、流紋岩は花崗閃綠岩の岩脈として、或いは海底火山での噴出物として産出した岩石である。珪質頁岩は、海底において、やはり新生代新第三紀の海底堆積物がその後の海底火山または、珪酸分の浸出により、珪質の緻密な岩石が生成されたと考えられる。

これらの流紋岩と珪質頁岩は、大野平遺跡よりも北方の織機川上流地域に産し、恐らく1,000万年も2,000万年もの地質時代を経て、浸食された岩石が川原に堆積した。それを採集して加工したものと考えられる。また、磨石の原石である砂岩は、明らかに新第三紀の海の堆積物である。その後、浸食により川に流れ、角ばった砂岩が削られて、丸みをおびた橢円状の岩石となり、川原で採集された原石と考えられる。

第8章 これからの課題

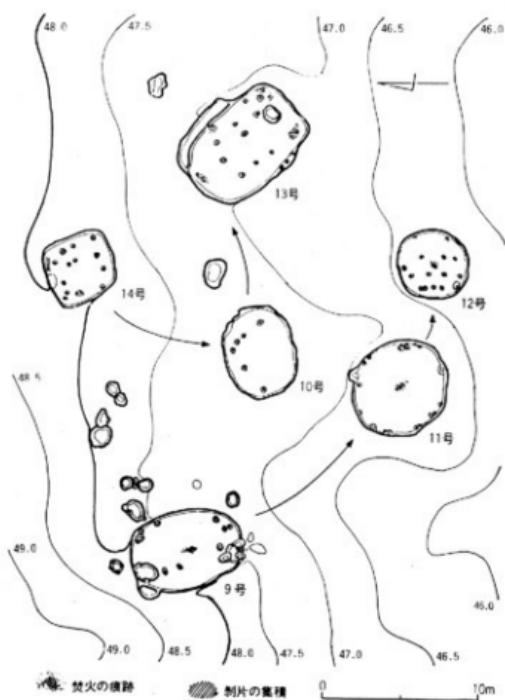
1 貝殻沈線文土器と住居跡について

第7章の表1-2(59-60頁参照)にまとめられたように、ここ10年間に、貝殻沈線文土器を使用した縄文人の堅穴住居跡・集落の調査が大きく進んだ。

大野平では、第2次調査でも沈線文土器(第I群上器)が出土した。これは第1次調査の第1地点で発掘された第1号住居跡からも出土している土器の仲間である。したがって今次調査の海拔464m前後の場所から、前回調査の462m前後の場所にかけて、大野平のややなだらかな地形の部分でも少しばかり尾根状をなす(凸状に等高線が描かれている)部分にかけて、沈線文土器群の散布を予想することができよう。

例えば、北海道函館市中野A遺跡で確められたこの時期に並行する6棟の堅穴住居跡群は、2棟1対の住居が台地の高み(海拔48.0m)から低いほう(海拔47.0~46.5m)に向って順次建て替えられたことが推定されている(注1)。

その推定の根拠はつぎのようなものである。—13号住居の床には、剝片や石器が放置されている。12号住居の床面から発見された石器には、これと同じ材料でつくり、接合できるものがある。12号・13号住居が同時に住居として利用されていたことはまちがいない。10号住居を埋めている土から出た土器と11号住居を埋めている土から出た土器、さらに13号住居の床面のすぐ上の



第37図 中野A遺跡の貝殻沈線文土器の時期の住居

(函館市教育委員会原図)

層から出た土器が接合している。したがって、10・11号住居はほぼ同時で、13号（そして当然12号）よりも古いと判然できる。

9号住居は、床面に剥片が放置されているし、小判形の平面形で大形であることも13号住居とよく似ている。しかし、この住居は周間に土塁が切り込んでおり、輪郭がひどくくずれている。この住居と土器・石器がほかの住居と接合しない14号住居とは、6棟の住居のうち、いちばん古いものと考えてよからう。そうすると、9・(14?)→10・11→12・13と2棟の住居が一対となって3期にわたって変遷をつづけていることになる（注2）。

もちろん、林謙作氏がいうように「この推定にまったく問題がないわけではない。なお今後吟味を重ねる余地もあるが」（注2），参考とすべき見解と思う。

事実、今次調査地点内で第I群土器の出土はわずか5点であり、堅穴住居跡の片鱗が出ているわけでもない。にもかかわらず、次回の調査箇所の重点とするに足るものと考える。第7章の考察（55頁）についての感想もある。

2 第II群土器（鶴ヶ島台式）について

大野平第II群土器は、「関東地方の鶴ヶ島台式に並行する」（本書65頁）。

最上川流域でのこの土器の初見は、村山市土生田遺跡においてである。以後、數カ所の遺跡で検出されている（注3）。

大野平でこれまで見られた早期縄文土器のうちで、この土器は標式となった神奈川県鶴ヶ島台日塚の土器にかなり類似する。つまり、もっとも広域に分布する縄文土器の一つであると考えられるのである（注4）。

—ここに、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式とよんだ各型式の土器は、従来「茅山式」の名で総称されてきたものである。……（中略）、これらの土器の文様の消長は、相互のあいだに大きな飛躍もみられず、ほぼ漸移的に変遷したものと理解できる。しかし、器形のうえには、野島式と鶴ヶ島台式のあいだにいちじるしい間隙があり、あきらかに一線がひかれる。つまり、尖底深鉢形をほとんど唯一の器形とする野島式に対して、鶴ヶ島台式には、あらたに段（屈曲）とくびれがみとめられ、さらに平底が一般化する。段の出現と平底の普遍化は、おそらく土器製作上において必然的な関連をもっていたのであろう。したがって、もし「尖底を有する本格的に古い土器群」を早期とするならば、鶴ヶ島台式以降の土器はそれからのぞかれることになる。…（中略）…。

条痕文土器群のうち、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式の各土器は、齊一性のつよい型式であり、それ以前の段階にみられた地域差を止揚しながら、近畿地方から東北地方南半におよぶひろい地域に、その分布圏を拡大した。このような広大な地域にわたる分布圏の拡大は、ひとつには遺跡の増

大があり、ひとつにはつよい浸透力にささえられてこそ可能であったと考えられる。

……（中略）……。

また、かぎられた地域での現象からいうと、遺跡立地の面に大きな変化のあったことがうかがわれる。野島式以前の土器をだす遺跡のはほとんどは丘陵の頂部や舌状台地の先端などのごくせまい、いわば局限された場所に立地している。いま、このようなありかたを早期的な立地とよぼう。野島式から茅山上層式にいたる各型式の土器をだす遺跡には、このような早期的な立地をしめるものもあるが、一方よりひろい平坦な台地——そこは、しばしば前期の時期のより大きな集落をいとなむために選定された場所であり、かりに前期的な立地とよんでおこう——に存在する例もかなり多い。つまり、いわゆる茅山式土器の時期における集落立地は、一方で早期的な立地を踏襲しながら、また他方でそれをこえた新しい地形的位置——前期的立地を選定しようとする傾向をしめしている。この傾向は、早期的なものを克服するなんらかの発展の力を暗示しており、具体的には森林伐採技術の高揚、集落規模の拡大などを想像させるものである。

このような発展は、なにによって裏づけられていたのであろうか。…（後略）…（注4）。

ここ大野平を単に「早期的な立地」の遺跡と片づけるか、「前期的な立地」をもあわせもったと理解するか。その展開の裏づけをより具体的に探らねばならない。

3 縄文・条痕文土器と住居跡について

この時期の竪穴住居跡を確実にとらえたものとして、今次調査は大きな意味をもつ。しかも、石組の屋内炉をもつことである。

最上川流域で石組の屋内炉が一般化するのは、例えば長井市宮遺跡の例のように大木7b式期ころからであるとされてきた。しかし、集落内の同時期の竪穴住居につねに同じように炉があつたりなかったりと歩調をとるわけではない。先に紹介した函館市中野A遺跡のばあいを再びみてみよう（注1）。

——さきに復原した住居の流れのなかでは、たえず大小の住居が一対になっている。また、屋内に焚火の痕跡をとどめるものとそうでないもの、間口・奥行がほぼ等しいもの（プランは円形か方形）と間口に比べて奥行のふかいもの（プランは小判形）の区分もある。これらの区分が何を意味するのか、はっきり理解されているわけではない。しかし、これらの区分が集落を構成する原理と何らかの形でかかわりをもっていることは確かであろう（注2）。

大野平の4号住居はどうやら隅丸方形を呈すると思われる。すべてを中野A遺跡との対比で片付けようとは思わないが、予想しておくべき課題と考える。つまり、これまで大野平遺跡で発掘され

た住居跡は、つぎの4時期にまたがるが、すべて各時期1棟のみである。

第I群土器（田戸式並行）—— 1号住居跡

第II群土器（鶴ヶ島台式並行）—— 3号住居跡

第III群土器（茅山上層式並行）—— 4号住居跡

第VI群土器（大木6式並行）—— 2号住居跡

果してそうなのか。これが次の調査の課題と考えるのである。

4 上川名II（室浜）式土器期の遺跡について

室浜式もしくは上川名II式とよばれている縄文土器も、東北地方南半では、かなりに広い分布圏をもつ。と同時に、遺跡の分布は急激に密になり、かつ大きい遺跡が目立ってくる。それは、いまから5500—6000年前ごろにあった海平面の上昇——縄文海進、それをひきおこした地球的規模での温暖化に対応するといわれている。

中部高地には、長野県諏訪郡原村の阿久遺跡のような各種の施設を整然と配置した集落が出現する。宮城県名取市今熊野遺跡や山形県北村山郡大石田町庚申町遺跡のように数十棟の住居跡が発掘されてもいる。また、秋田県能代市杉沢台遺跡では、最大222m²の大型住居がみられる。

こうした時期の直前が室浜式期である。つぎの機会に、大野平遺跡でのこの期集落のあり方を探る一助となるために、周辺地域の遺跡をリスト・アップして後考に備えたいと思う（注5）。

注

1 函館市教育委員会 「函館空港第4地点・中野遺跡」 1977年

2 林 謙作 「縄文時代」「図説 発掘が語る日本史」1 北海道・東北編 71—72頁
1986年

3 加藤 稔 「東北裏日本の早期縄文式文化の編年」「山形史学研究」3 1961年

4 岡本 勇・戸沢充則 「関東——縄文文化の発展と地域性——」「日本の考古学」II（縄文時代），97—132頁 1965年

5 リストの作製には、柏書房『日本歴史地図』 1982年を利用した。

東北地方南部の上川名Ⅱ（室浜）式期の遺跡

〔山形県〕

No	遺 跡 名	所 在 地
1	葡萄崎	酒田市 飛島字勝浦
2	平沢	最上郡最上町 向町字水上
3	仁田山	新庄市 萩野字塙野 123—294
4	福田山A	新庄市 福田字福田山
5	二間磯ノ沢B	新庄市 二間字磯ノ沢
6	岡山A	鶴岡市 藤沢字輕井沢 191—221
7	大測台	西田川郡温海町
8	庚申町	北村山郡大石田町 大石田字古盾 623
9	赤石	村山市 土生田字赤石
10	三カノ瀬	村山市 白鳥字小国沢 3069
11	壁山	村山市 本飯田字壁山 1156・1647 他
12	柳平	村山市 湯沢字柳平モキシ柴山官有地
13	矢島	村山市 揃山字手塚森 1554—1 他
14	後沢	西村山郡河北町 西里字後沢 3771
15	岩木B	西村山郡河北町 岩木字岩木 220
16	山岸	寒河江市 寒河江 2707
17	上野	山形市 蔵王上野
18	上平	山形市
19	高瀬	山形市 大森字入与田
20	八幡台I	西置賜郡白鷹町 鮎貝字八幡台 1059
21	野山II	西置賜郡飯豊町 小白川字野山 3395
22	陣力峯	西置賜郡飯豊町
23	大野平（須刈田）	南陽市 漆山須刈田
24	相馬山	東置賜郡川西町 時田字相馬山 2321
25	尼子岩陰群	東置賜郡高畠町 二井宿字小湯
26	日向洞穴群	東置賜郡高畠町 竹ノ森字姥カ作41・尼子14
27	火箱岩洞穴群	東置賜郡高畠町 時沢字大師森

No	遺 跡 名	所 在 地	
28	一ノ沢岩陰群	東置賜郡高畠町	安久津字一ノ沢
29	羽 口	東置賜郡高畠町	竹森字羽口 3771
30	鳥取山洞穴	東置賜郡高畠町	安久津字清水山
31	大峯原	東置賜郡高畠町	二井宿字小湯
32	青井流	東置賜郡高畠町	二井宿字東小湯
33	神立洞穴	東置賜郡高畠町	二井宿字蛭沢・大神立沢
34	ムジナ岩洞穴	東置賜郡高畠町	安久津字清水山 3217 の 1
35	金 原	東置賜郡高畠町	金原
36	松 原	米沢市	関根字松原 26008-9
37	普門院	米沢市	関根 13928
38	八幡原 A	米沢市	万世町牛森字清水北・八幡原
39	八幡原 B	米沢市	万世町牛森字清水北・八幡原
40	横山 A	米沢市	竹井字横山
41	台ノ上	米沢市	吾妻町40-46
42	清水北 C	米沢市	万世町牛森字清水北・八幡原

(福島県)

No	遺 跡 名	所 在 地	
1	赤石沢	相馬郡飯館村	飯穂字赤石沢
2	野 沢	相馬郡飯館村	関沢字野沢
3	大 火	相馬郡飯館村	飯穂字大火
4	羽 白	相馬郡飯館村	大倉字羽白
5	宮田貝塚	相馬郡小高町	上浦字宮田
6	花 輪	相馬郡小高町	大井字花輪
7	藤右衛門屋敷	相馬郡小高町	神山字藤右衛門屋敷
8	滝ノ原	原町市	馬場字滝ノ原
9	桜 川	耶麻郡猪苗代町	大字磐根字桜川
10	上ノ山	河沼郡会津坂下町	塔寺字上ノ山
11	下萩曾根	大沼郡会津高田町	永井野字下萩曾根

No	遺跡名	所在地	
12	古龜田	郡山市	龜田二丁目
13	鳥見	双葉郡浪江町	南津島字鳥見
14	搦手入	田村郡船引町	中山字搦手入
15	寺前	南会津郡田島町	字寺前
16	道南	西白河郡西郷村	小田倉字道南
17	羅漢山	白河市	羅漢山字羅漢
18	源平C	石川郡石川町	曲木字源平
19	日向前A	東白河郡棚倉町	棚倉字日向前

(宮城県)

No	遺跡名	所在地	
1	三神峯	仙台市	三神峯一丁目10他
2	川添東	仙台市	茂庭字川添東4-12他
3	戸谷沢	白石市	大鷹沢字戸谷沢
4	西A	白石市	越河字西23
5	小久保平	白石市	小原字小久保平
6	大網	白石市	福岡八宮字大網
7	垂清日向	白石市	福岡八宮字垂清日向
8	家老内	白石市	福岡深谷字家老内
9	湯ノ口	白石市	福岡深谷字湯ノ口
10	小菅	白石市	大鷹沢字小菅園
11	保原平	白石市	福岡深谷字保原平
12	上川原子	白石市	福岡八宮字上川原子
13	三本木	白石市	福岡深谷字三本木
14	上高野	白石市	福岡深谷字上高野
15	高野	白石市	福岡深谷字高野
16	荒井	白石市	福岡深谷字荒井
17	白烟	白石市	福岡深谷字白烟
18	間内山	白石市	福岡深谷字間内山

No	遺 跡 名	所 在 地
19	風 卷	白石市 福岡深谷字風卷
20	上屋敷B	白石市 福岡深谷字上屋敷1
21	藏王開拓E	白石市 福岡八宮字藏王開拓
22	鱗 沼	角田市 角田字鱗沼
23	土浮貝塚	角田市 小坂字土浮 117・120～122
24	南光院	角田市 横倉字南光院
25	長 老	七ヶ宿町 字柏木山
26	上ノ平C	七ヶ宿町 字上ノ平
27	長峰(欠)	藏王町 宮字長峰・欠
28	明神裏	藏王町 宮字明神裏
29	持長地	藏王町 宮字持長地50
30	七日原	藏王町 遠刈田温泉字七日原
31	上曲木E	藏王町 円田字上曲木
32	大平山A	村田町 足立字大平山
33	松崎貝塚	柴田町 櫻木字松崎 6・8～12
34	館前貝塚	柴田町 櫻木字館前
35	深町貝塚	柴田町 入間田字深田町
36	中居貝塚	柴田町 入間田字中居
37	金谷貝塚	柴田町 入間田字金谷前
38	上川名貝塚	柴田町 上川名字神廻り戸・新藏田
39	下 座	川崎町 小野字下座
40	碇	丸森町 小齐字碇
41	青葉西	丸森町 大内字青葉西
42	佐野西上	丸森町 大内字佐野西上
43	松 圈	丸森町 小齐字松圈
44	桂島貝塚	塩釜市 浦戸桂島字台圈
45	船入島貝塚	塩釜市 浦戸船入島
46	金剛寺貝塚	名取市 高館川上字金剛寺
47	今熊野遺跡	名取市 高館川上字南台・北台

No	遺跡名	所在地
48	宇賀崎貝塚	名取市 愛島小豆島字宇賀崎
49	十三塚	名取市 手倉田字箱塚・屋敷
50	堰下開	亘理市 逢隈字堰下
51	小城内	亘理市 逢隈田沢字小城内
52	下大沢	山元町 浅生原字下大沢
53	南権現	山元町 真庭字南権現
54	行沢	秋保町 境野字行沢
55	福浦島貝塚	松島町 松島字福浦島
56	鷺島貝塚	松島町 磯崎字鷺島
57	貝殻塚貝塚	松島町 竹谷字後沢
58	多賀城跡	多賀城市 浮島字宮前
59	西上野原	泉市 福岡字西上野原
60	左道貝塚	七ヶ浜町 東宮浜字左道
61	根古	大和町 吉田字根古南園
62	湯舟沢	富谷町 富谷字湯舟沢
63	四反田	大衡村 大衡字四反田
64	上深沢	大衡村 駒場字上深沢
65	金谷	大衡村 大衡字金谷園
66	ごふく沢	古川市 清水字三丁目成田谷地田
67	雨生沢	古川市 雨生沢
68	小梨沢A	小野田町 字小梨沢
69	芋沢	小野田町 字芋沢勝山
70	上の原	宮崎町 孫沢字上の原
71	滝の上	宮崎町 宮崎字寒風沢
72	地蔵館	宮崎町 米泉字泥坂屋敷
73	小池裏	宮崎町 米泉字小池裏
74	三吉平	宮崎町 米泉字東野
75	古城	宮崎町 米泉字西野
76	後山	宮崎町 宮崎字洞靈寺

No	遺 跡 名	所 在 地
77	土利壇	色麻町 黒沢字土利壇
78	混内山	三本木町 蟻ヶ袋字混内山
79	天神山	岩出山町 字轟
80	向金沢	岩出山町 字轟
81	上の座	岩出山町 字轟
82	茅野	岩出山町 字細峯
83	戦切壇	岩出山町 下野目字向山・座散乱木
84	新田A	岩出山町 下野目字新田
85	座散乱木	岩出山町 下野目字座散乱木
86	抑口	岩出山町 下野目字座散乱木
87	安沢	岩出山町 下野目字逢坂
88	奴加里	岩出山町 下野目字上北坂
89	大山庵	岩出山町 下野目字大久保・大平
90	合戦原	岩出山町 南沢字木戸脇裏
91	木通沢	岩出山町 南沢字木通沢・曲田裏
92	丸山	岩出山町 下野目字丸山・南山
93	草井前	岩出山町 池月字草井前
94	矢木下	岩出山町 池月字上宮・館下
95	村山	岩出山町 下野目字新田
96	松森南	岩出山町 下野目字松森南
97	抑口B	岩出山町 下野目字座散乱木
98	十文字	岩出山町 上山里字葛岡十文字
99	向山B(四軒茶屋)	岩出山町 下野目字向山
100	西天王寺	岩出山町 上野目字西天王寺
101	宮城平	岩出山町 上野目字朴木欠
102	長根貝塚	涌谷町 小里字長根
103	堺沢貝塚	涌谷町 涌谷字堺沢
104	下長根	田尻町 大貫字四嶋
105	西手取	高清水町 小山田字西手取

№	遺跡名	所	在地
106	大寺	高清水町	字佐野丁十二神
107	大栗	一迫町	字大栗
108	千代子沢	一迫町	字下小僧・中小僧
109	清水田	一迫町	字川口清水田
110	山ノ神	一迫町	字川口沢山
111	紙漉沢	鶯沢町	字北郷紙漉沢
112	坂下A	花山村	字草木沢坂下
113	八ノ森貝塚	迫町	北方字八ノ森
114	浅部貝塚	中田町	浅水字浅部
115	南最知貝塚	気仙沼市	字最知南最知
116	仁斗田貝塚	石巻市	田代浜字内山
117	二鬼城崎	石巻市	田代浜字二鬼城
118	南境貝塚	石巻市	南境字妙見
119	日影貝塚	河北町	相野谷字日影
120	餅田貝塚	矢本町	大塙字餅田
121	桑柄貝塚	河南町	北村字桑柄
122	室浜貝塚	鳴瀬町	宮戸字室浜浦口開
123	里浜貝塚	鳴瀬町	宮戸字里浜・西畑
124	高松貝塚	鳴瀬町	高松字日照沢
125	金山貝塚	鳴瀬町	野蒜字金山